英国春秋

２０２３年　秋号
ISSUE 43
（令和５年）
発行　英国日本人会

はじめに

先日森で桔梗の花を見つけました。珍しい場所にと一瞬思いながらも、ああ秋の知らせの第一報かと受け取りました。わが国では七種の草花、萩、すすき、葛、撫子（なでしこ）、藤袴、女郎花（おみなえし）、桔梗、を秋の七草と呼び、和歌に詠み、襖絵や掛け軸に描いて親しんできました。しかし近頃は「七草って何？」と聞く人の方が多いかもしれません。これらが咲く時期も旧暦ではないのでズレがあるようです。この七草のうちイギリスで身近に見つけられるのは、ススキ、桔梗、なでしこ、萩（似たような花）の４種類くらいでしょうか。ススキの穂が風になびく風景は秋の深まりを彷彿とさせてくれますが、撫子や桔梗は花屋では春から初夏にかけて見かけられます。ナデシコと言えば最近の日本人には花よりもサッカーを連想させることでしょう。また黄色の小花をつけて咲くおみなえしの花を女郎花と書かせるのも、名の由来は別として、女郎（じょろう）と読めば遊女、女郎（めろう）と読めば女性をののしる言葉となり、花にとっては迷惑千万かもしれません。
秋の野に咲きたる花を指折（およびお）りかき数ふれば七種の花　　山上憶良
と詠われた万葉の時代は遠くなりにけりです。

朗報と喜びたいところですが、まだそれのお世話にならなくて良いので、この喜びは“？マーク付”かもしれません。日本の製薬会社、エーザイが“レカネマブ”と呼ばれるアルツハイマー病の薬を開発しました。これまでの薬のように症状を和らげるのではなく、進行に直接働きかけると言われ、アメリカではすでに承認済み、日本では９月末までに、ヨーロッパでは今年中に承認されるそうです。加齢とともに体の機能が衰えて行くのは自然と言え、日常生活に支障を及ぼす認知障害にかかるのではないかとは多くの人が抱く恐れです。この薬がその不安を少しでも和らげてくれるかと思えば、やはり朗報と喜ぶべきでしょうね。

画集のページを繰っていてデューラーの「黙示録の四騎士」の木版画に出会いました。あまり好きな画ではありませんが、しばらく眺めていると少々怖くなってきました。物語を今の世に照らしてみると、コロナ蔓延に始まり、ウクライナ vs ロシア戦争勃発、地球温暖化による異常気象で火災、洪水、飢饉が多発とは、四騎士が象徴する疫病・戦争・飢饉・死に当てはめられるのではないかと思われたからです。一年半前に始まった戦争は泥沼状態、本日８月１９日付のタイムズ紙では､現在までに両国合わせ 500,000 人近くの死傷者が出たと報じられています。それにまたウクライナが切望している F-16 のファイタージェットの供与により､戦況がますます激化するだろうことは火を見るより明らかです。
今回のロシア軍による黒海封鎖はウクライナからのアフリカへの穀物の供給がストップされ、すでに飢饉で喘いでいる人々をより苦しめることでしょう。人間が始めた戦争だから人間がそれを終結させねばならないのは当然ですが、それが出来ないとは、彼らはもう人間ではなくなってしまったか、と思わずにはおれません。

＊　＊　＊　　もくじ　　＊　＊　＊

はじめに		２
もくじ		３
泥の中から咲く蓮の華	石井建心	４～　５
取り残された電話	園部健治	６～　７
今の自分があるのは	加藤節雄	８～　９
六十の手習いならぬ、七十一からの筋トレ	内田フィンチみつえ	９～１０
英国春秋俳壇　ラベンダーの花	エリオットつや子	１１
女王最大の後悔の地　～涙で曇ったウェールズの旧炭鉱町～	加藤美喜	１２～１４
黄金都市、サラマンカ	小川のり子	１５～１７
英国春秋歌壇　はなやぐ心	バロー典子	１８
季節を告げる空飛ぶ妖精たち	ビドル惠	１９～２２
広島カープ、惚れる	石山望	２３～２５
私の英国植物史	須永静江	２６～３０
言語化できますか？	伊東敬行	３１～３３
陽光に輝く街、サラエボ	ビドル惠	３４～３６
ＮＨＳ 二泊三日	一静斎	３７～４１
英国日本人会の皆様	田辺邦彦	４２～４３
読んだ、憧れた、行ってみた　- 西域を旅した人々について -	中沢賢治	４４～４７

秋号の特別寄稿者

石井建心氏	三輪精舎副主幹
加藤美喜氏	中日新聞（東京新聞）前ロンドン支局長
園部健治氏	在英国日本国大使館参事官兼領事
田辺邦彦氏	元在英国日本国大使館　領事
中沢賢治氏	元在ロンドン国際金融機関職員

アイウエオ順

泥の中から咲く蓮の華

石井建心

「蓮」は六月から八月に咲き、短歌や俳句においても古くから夏の季語として多くの人々に親しまれてきました。蓮は、泥水の沼や池から真っ直ぐ茎を伸ばし、その先に綺麗な花を咲かせます。

これまで佛教徒は､蓮の華を佛さまの覚りの象徴として拝んできました。ではなぜ蓮の華が覚りの象徴とされたのでしょうか？

蓮にはロータス効果と呼ばれる特別な撥水性があります。たとえ蓮の華や葉に汚れが付着しても､この効果によって蓮は汚れに染まることなく、その清らかさを保ち続けます。古代の人々は、そのような蓮を、どんな心の汚れにも染まることなく真実を伝え続ける佛さまのお覚りの象徴として拝んでこられました。お盆の時期に、蓮の華をお佛壇にお供えする習慣があるのも、そのような思いから生まれました。

本日は蓮の開花に必要なものから学ぶ、佛教の大切な教えを少しご紹介させて頂きます。

蓮の開花に必要な泥、水、光、種

■「泥」（煩悩にまみれた心の自覚）

佛法では、美しい蓮の華が泥から咲くことをとても大切に考えてきました。

それは蓮の「華」が覚りの象徴であるのに対し、「泥」を私達の心（迷いの世界）の象徴として捉えてきたからです。

私達が生老病死で苦しむのは、人間の持つ「煩悩」が原因となって、人生も老いも病も死も、全て自分の思い通りにしたいという執着が生まれるからです。

しかし実際は、自分の思い通りになるものなど何一つありません。

浄土真宗の開祖・親鸞聖人は「自らの心の状態を自覚する」という佛さまの教えを深く受け止められ、徹底的に自己を見つめられました。

親鸞聖人の自己への目覚めは、お釈迦さまが「人生は苦である」と仰ったように、「自分は不浄な泥である」というご自覚でした。

親鸞聖人のご自覚から教えられることは、自らを内省し、心の不浄に気づいたときには素直に懺悔することの大切さであります。

この気づきを頂くときに忘れてはならないことは、蓮は高原の乾いた陸地には生息せず、湿った泥（私たちの汚れた心）から咲くという教えです。

病人がいるからお医者様がいて下さる様に、私たちの人生に苦しみがあるからこそ、その苦しみから救ってあげたいと思う佛さまのお慈悲が存在するわけです。

■「水」（乾いた心を潤す佛さまの教え）

すべての動植物にとって「水」は命の源です。一般的な植物の場合、水が多すぎると根腐れをすることがありますが、蓮の場

合は根腐れせず、泥が水面から三〇センチほど下にあるのが理想だとされています。
この夏の時期に雨が不足すると、庭の土が乾燥してコンクリートのようにカチカチになることがあります。ホースを使って水を撒いても、水が土の表面を流れるだけで、なかなか水を吸収しません。
私たちの心もこれと同じです。佛さまの教えである法は、ときに「法水」と表現されます。私たちの心が一旦乾き切ってしまうと、法水を吸収し心を潤すまでに、通常よりもはるかに時間がかかってしまいます。蓮は湿った泥にしか咲かないので、日頃から佛さまの教えである法を聞いて、常に心が潤った泥の状態にあることが大切です。佛さまの教えは、私たち人間の心の渇きを本当の意味で潤すことのできる唯一の水なのです。

■「光」（闇を照らし温もりを与える阿弥陀さまのはたらき）

他の植物と同様に、蓮も日光を必要とします。泥は私たちの心を表し、水は泥の渇きを潤す（教え）を表していると述べました。では、光は何を表しているのでしょうか？
それは「佛さまのはたらき」です。佛さまのはたらきとは、私の心（泥）を照らす光です。
蓮は日光を浴びないと黄色くなって枯れてしまいます。同じように、私たちの心も光がなければ不健康になってしまいます。
阿弥陀佛の光の温かさに触れると、私たちは常に光を欲するようになります。私たちを包み込む佛の光は、常に周囲の人々の言葉や行動を通して現れます。その光は、私たちを取り巻く人々や現象を通して、私たちを優しく、あるいは間接的にいつも照らしてくれています。
良いことであれ悪いことであれ、身の回りの出来事が自分にとって何を意味するのかを真摯に考えると、佛さまの光がいつも人生を照らしてくれていることに気づけるようになります。

■「種」（阿弥陀さまの大きな慈悲）

蓮の開花に必要な泥、水、光の他に、忘れてはならないのが蓮の種です。古い蓮の種に関する記事によると、さまざまな学者や研究者が史跡で発見された蓮の種の発芽に成功しています。
大賀一郎博士が発芽させた有名な千葉県の大賀蓮は、二千年前の蓮の種が発芽したものです。

二千年の間、眠っていた蓮の種は何を意味するのでしょう？
これは、私たち一人ひとりに「真実に目を開きなさい」と願い続けられる阿弥陀さまのお慈悲と頂けます。
阿弥陀さまの慈愛に満ちた蓮の種は、私たちが自らの心の渇きに気づき、法水を求めるようになることを辛抱強く待ってくださっているのです。
私たちにおかけ頂く阿弥陀さまの大慈悲は、自分の心に植えて頂いた蓮の種です。
そのご恩に気づき、感謝の心（信心）を賜ると、自分の善悪の価値観に囚われていた目線が変わり、苦しみと煩悩に満ちた泥沼の人生が、過去の全てに感謝できる明るい人生に変わります。
水も光も種も、すべて佛さまから賜るものばかりです。
お念佛は、そのご恩に目覚めた時に湧き上がる、「ごめんなさい。有難うございます」というごく自然なお礼です。

美しい蓮の華が私たちの心の泥に咲くことを願って種を植えて頂いたご恩に、心静かに御礼を申し上げましょう。

取り残された電話

園部健治

最近、ふと、最後に公衆電話を使用したのがいつのことだったか記憶にないことに思い至った。毎日、通勤途次に何気なしに横目で見ていた公衆電話ボックスにWET PAINTや、思わず立ち止まって写真を撮ってしまうことになってしまったのだが、“It’s time to remove this payphone”との貼り紙が目についたからかもしれない。

世の中どころか、我々の生き方をも一変することになったとさえいえるスマホの登場により、電話をかけるとの概念は大きく変わってしまった。

いまだそれなりの数の公衆電話（ボックス）は設置されているが、もはやその役割を終えたのではないかと感じるのは日本のみならず、ここ英国でも同じではないかと思う。英国といえば赤いポストと赤い公衆電話ボックスを連想したのも最早、過去のことで、公衆電話ボックスは文字通り色褪せたものが目立ち、旅行者が記念写真を撮る背景に収まっていればまだ良い方で、利用している人を見かけることはまずなく、見る影もなくなってしまった。一部、ATM として利用可能なものに姿を変えたもの（？）も所々で見かけるが、見るからに怪しく、危なくてとても利用したい思わせるものではなく、これも利用してる人を見かけたことはない。

実家を離れ下宿していた大学時代（昭和５０年代後半、西暦では１９８０年代前半）、下宿先の部屋に電話はなく、２階の大家さんから、“園部くん、電話だよ”と声がかかり、階下にある電話に切り替えてもらって話をしたことを昨日のように思い出す。不便だとは感じていても、あの時代、電話を下宿先に引くなど地方出の学生には贅沢だと分かっていた。また、大家さんの電話回線を長時間塞ぐわけにもいかないので、そんな長電話をする相手もいなかったが、必要があれば、下宿のすぐそばにあった公衆電話を利用するしかなかった。公衆電話自体はまだまだ身近な存在だったし、それが当たり前だとも思っていた。そして、地方から出てきた身にとって、公衆電話ボックスは、ふる里とつながっていることを確かめられる場所でもあった。

スマホは、契約している通信会社の回線ではなく、相手とLINE、WhatsAppやVIBERのようなメッセージングアプリ(無料通話アプリ)を使えば料金を気にすることはない。何と便利になったことか。これに対して、公衆電話には否が応でも電話をかけている人に感じさせる“もの”があった。話している相手との“距離”である。

日本の公衆電話でテレホンカードが使用できるようになったのは昭和６２(１９８７)年。ふる里にかける場合など、小銭（１０円）を握りしめ、硬貨が落ちる音を聞きながら、次から次へと硬貨を投下する（！）必要はなくなったが、度数は硬貨と同じ１０円単位であったため、度数の減り方が早いことで、遠く離れたところにかけていることを思い知らされた。電話という便利なものでも越えられない“もの（距離)”があることを否が応でも感じざるを得なかった。まさに、“ふるさとは遠きにありて思ふもの”を実感させられる瞬間だった。

スマホの普及により、公衆電話のみならず、固定電話すら使用する機会は職場等限られた機会を除けば殆どないというのが現実ではないかと思う。通話料を気にしなくても通話できるようになった今、最早、“距離”を気にする必要はなくなったのかもしれないが、実際に“距離”があるのに、それを感じないというのは素晴らしいことである反面、何とも不思議な話である。これこそまさに文明の利器に違いない。

QUEEN に“RADIO GA GA”という曲があり（１９８４年リリース)、下宿していた頃によく聞いた。かつてラジオの時代があり、ラジオには力があったが、まだ輝く時があり、君（ラジオ）を愛している人はまだいるよ(Radio, someone still loves you)との歌詞は、どこか、スマホにとって代わられた固定・公衆電話を思い起こさせなくもない。かくいう私も、ロンドンの自宅に固定電話はなく、公衆電話も使わない。時代の流れといえばその通りなのだろうが、この曲のように、まだ固定・公衆電話を愛している人はいるのだろうかと思わずにいられない。

この曲を思い出したのには訳がある。新型コロナウイルス感染症が拡大し、英国のようなロックダウンはなかったものの、旅行、帰省の自粛が求められていた日本において、実家で一人暮らしをしていた母の様子が心配だったこともあるが、週１回土曜日の夜に固定電話に電話して話すことが、いつの間にか決まりのようになった。それは英国に赴任してきてからも変わらず、毎週１回、日本時間土曜日の夜に実家の固定電話に電話をかけ、母と話をしている。何とも恥ずかしい気もするが、生まれてこのかた、こんなに母と話したことはないし、こんなに話すことになるとは思ってもみなかった。

母は携帯電話（ガラケー）を持っていたが、まさに緊急用で、普段ほとんど使うことなく、いつも固定電話を使っていた。そのガラケーが使用できなくなる機種であったことから、昨年、スマホに切り替えた。それでも、(電電公社の）電話交換手として長年働いた母にとって、電話は携帯電話やスマホではないのではないかと思っている。スマホに切り替えた今でも、基本的には固定電話を使っている。従って、こちらからかける電話も固定電話にかけることになっている。

遠く離れていても、メッセージングアプリでも通常の電話回線でも、電話を通して聞く声で安心し、それを待ち遠しいと思ってくれているのであれば、スマホでも固定電話でも公衆電話でも変わらない。

電話代は嵩んでも、固定電話のそばで電話を待つ母の顔が浮かぶと、それには代えられない。時代遅れでも構わないではないかと思いながら、今週もまた母に電話する土曜日が近づいてきた。そして、無性に RADIO GA GA を聞きたくなった。

今の自分があるのは

加藤節雄

私の父親は新聞記者だった。
ただし、私は父が働いている姿を見たことがない。
というのも、父は第 2 次大戦中に徴兵されてシンガポールで終戦を迎え、無事に帰国したが、結核を患っており、長い療養生活の末、私の子供の頃に亡くなってしまったからだ。

父の書いた原稿や掲載された新聞や雑誌も我が家には残っていなかったので、父親がどんな取材をして、どんな記事を書いていたのかは皆目見当がつかない。母親からは朝日新聞社運動部の記者だったと教えられた。父親は中学・高校・大学と陸上競技の選手だったそうである。

私は子供のころから何となく自分も新聞記者になるのかというような感じでいた。特に憧れたわけでも、母親から勧められたわけでもない。ただ漠然とそんな気持ちになっていたに過ぎない。それが高校生の頃に大学受験という課題を突き付けられ、父親の大学である早稲田大学を選んだ。しかも当時政治経済学部の中にあった新聞学科という新聞記者養成の学科を選んでしまった。

迷いはなかった。全国から集まっていたクラスメートは、新聞やテレビ、その他のマスコミのジャーナリストになることを志望していた。自分も当然ジャーナリストになるものと思い込んでいた。大学 4 年生になった時、ある知人から「英国の通信社の東京支局が大学出身者を求めている」という情報が母親を通してもたらされた。私は受けることにした。国際ジャーナリストも悪くない。しかもアメリカではなく英国の通信社というのが興味を引いた。当時の早稲田の学生にとって、アメリカは俗悪のシンボルだった。私も「コカ・コーラ、チューイングガム、ティーンエージャーは世界の 3 悪」と言ってはばからなかった。アメリカ文化を否定することが格好良いと思われていた頃である。

面接に行ったら、「明日から来てほしい」と言われた。外資系の会社はちょっと違うという印象を持った。しかし、私はまだ学生であり、卒業もしていない。これから卒論を書かなければならないし、試験もある。結局、時間のある時に会社へ行って仕事を覚えるということで合意し、私の学生とジャーナリストの 2 重生活が始まった。

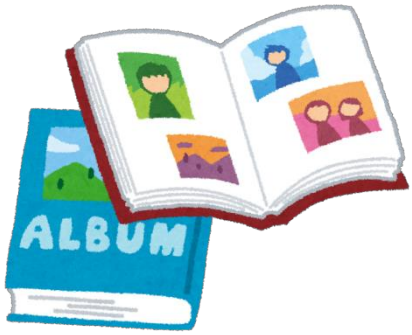
私が一つ不覚だったのは、この英国の通信社がニュース写真の通信社だったことである。紹介してくれた人も言わなかったし、面接でも私のスキルや大学での活動を大分聞かれたけれども、仕事の内容に関してはあまり教えてくれなかった。「明日から来い」ということに焦ってしまって、判断が狂ってしまったのかも知れない。私の仕事は事件や記者会見、各種イベントの写真を撮って、それをロンドンの本社に送るということと、毎日本社から送られてくる写真を新聞や雑誌といった日本のメデイアに流すことだった。

大学時代に写真は撮ったことはあるが、どこかへ旅行に出かけた時に記念写真を撮影するぐらいで、ちゃんとしたカメラも持っていなかった。それが、会社のカメラ(ニコンの一眼レフカメラ)を渡されて、本格的に撮影することになってしまった。もちろん最初は見習いということで、先輩から教わりながら撮影テクニックから、現像、引き伸しといった暗室作業まで習った。結局、私は 3 年半ほどこの通信社に勤め、報道カメラマンとなってしまった。

今思えば、この経験が私をフリーランスという職業へ導いてくれたと思っている。1970 年に通信社を退職してシベリア鉄道経由で英国へ渡ったが、私はそれ以来フリーランスのフォトジャーナリストとして生計を立てて来た。早稲田でのジャーナリスト教育、そして報道カメラマンとしての現場取材の経験

が大変役に立っている。

今の職業が自分の好きな職業だったかどうかは定かでないが、なるようにしてなった職業であるとは言えそうだ。それを裏付けるようなことが最近あった。私は最後の家族である姉を 3 年前に亡くしたが、最近になって彼女の所有する東京のマンションの処分をした。荷物を整理する中であちこちから写真アルバムが出てきた。母や姉も写真が好きで、旅行に出かけるたびに写真をアルバムに貼って整理していた。驚いたことに父の撮影した写真がたくさん出てきた。父の制作した私の成長記録というアルバムまで出てきた。どれもプロ並みの写真である。ただしどれも仕事での写真ではなく、登山したときとか、兵役の際に訪れた場所とか、友人や家族・親戚の写真である。このことを親戚の叔母に話したら、私の父は写真が好きで、ライカのカメラを持ち、自分で現像プリントして楽しんでいたそうである。それに影響されて母が写真を撮るようになり、姉も一眼レフカメラを持つほどになっていた。どうやら私の一家は写真家族だったようである。今の自分があるのは、結局は家族の影響だったと言えそうだ。



--

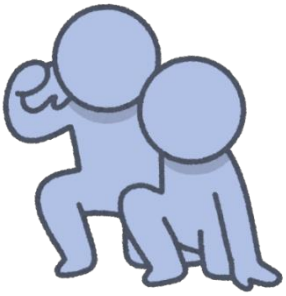
六十の手習いならぬ、七十一からの筋トレ～

内田フィンチみつえ

最近、何を思い立ったか筋トレを始めました。今迄ジムが嫌いで行ったこともない私が、『筋肉は何歳からでも鍛えれば付く』を信じスタートしました。私のパーソナルトレーナーは私の年齢は聞かずにプログラムを組みトレーニングをしてくれ、また褒め上手で気分を乗せるのがとてもうまいのです。3 度目のセッションでしたでしょうか、この日も Dead lift というのをやりました。初回から徐々に重さを上げて 55 キロに挑戦させられ、少し調子に乗り過ぎた感もあるのですが、彼の指示のもとにスタートしました。Dead lift のトレーニングは、インタバル入れて 3 セットするのですが、1 セットは意外と楽に、そのせいか、2 セット目でふと「ああ、、終わったら何を食べようかな～」と考えた一瞬、ぎくーーっと腰に来てしまったのです。このデッドリフトは上半身、下半身両方を使ってバーベルを腰の位置まで持ってきて固定するのですが、集中力が崩れ、油断してへっぴり腰でやってしまいました。これは再起不能かと心配したのですが、数日安静にしたらまた元のようになり、胸をなでおろすと同時に、彼には、私は 71 歳と打ち明けることにしました。しかし、彼は余り年齢には興味がなく、その後も適度なチャレンジを続けています。そしてこの Dead lift は自分の体重を持ち上げることができればそれで上出来(女性は特に）というようなことがインターネットには出ていて、私は 47 kg なので、55 kgは Too much で、反対に私が Dead となるところでした。マンキーマインドはご法度、集中力・フォーカスがいかに大切かを学びました。

そして、この筋トレ効果が思いもよらぬところで最近発揮できたのです。ヨガの帰り道、歩道で少しよろよろとしている老婆(とはいえとても小奇麗な私とあまり変わらない年齢層の女性)が地面に崩れ落ちそうになっていたのですが、最初はつまずいたくらいに思い通り過ぎようとし、戻ってみると正に地面に足から崩れ落ちる寸前となっていた彼女を後ろからぐっと支え、ゆっくりと地面に座らせ、そしてヨガマットを枕にして横にさせました。ここは時間帯によってはほぼ人通りを見ないときもあり、携帯を持って出ていなかったので、ご近所に助けを求めて入った最初の家は、何とこれまた高齢化社会を目の当たりにするような、杖を突いたおじいさんが片足をびっこ引きながら出てこられたので丁重にお断りし、次の家に、ここはお留守だったので、元の場所へかえると、若い夫婦がクッションとお水をもって立っているでは。これまた、現代のトレンドを反映し、在宅勤務中に窓を見たら老婆が横たわっているので出てきました～っと。金曜日の午前 10 時の出来事。普通ならば若夫婦はオフィスで働いている時間、でもパンデミックで在宅勤務が始まり、その名残で家で二人で仕事をしていたようでした。ちなみにとても素敵なカップルでした。

さて前置きが長くなりましたが、この女性はとても体格が良くどう見ても 75 キロはありそうな、そんな彼女がこの場所ではなく自分の家の中で救急車を待ちたいというので歩けるかどうかを確かめるために、私は彼女を背後から羽交い絞めでかかえ、なんと Dead lift をする時のように、中腰となり全身で彼女を支えて立たせることに成功しました。これぞ日ごろの筋トレ効果と嬉しくなり内面ほくそえんでいましたが、彼女は必至で私に体重をかけてすがってくるではないですか。。。本当に実践で筋トレをしているようでしたが、無事に若い女性と一緒に 5 分ほど先の彼女の家まで歩いて送ることができました。



意外と救急車は早く来て(30 分後)、そこで私はその場を去り帰路へ。生年月日や状態を救急車の方に説明するために、彼女が 76 歳と判明、そしてクルージングに最近行き、5000 人の人と一緒に過ごしたが退屈で面白くなかったと説明してくれましたが、私もクルージングは好きではないのでその点は同感でしたが、まあ倒れていてもそんな文句を言えるのもすごいなぁっと、少し感服しました。早い回復を祈り別れました。

と、ここでこのお話は終わらずに、翌日犬を連れて、散歩へ。そして散歩コースが彼女の家の辺りで、何といつもうちのプードルはその家の前辺りで Poo をしていたのでこれからは気をつけなければと窓を見ると彼女が手を振っていました。挨拶にいくと、昨日のお礼と病名は何だったのかを教えてくれ、どうも「コロナ」だったそうです。うわああ、私は超接近者ではないですか。聞かなければよかったなあっと思ったのですが、後の祭り、なんかその夜熱っぽく、だるさを感じてもしやと。私は単純人間で左右されやすいので精神面からどうもコロナに罹ったようです。今迄娘達がかかっても私は罹らず、免れたけど、今回は彼女の手をさすったり、身体を抱えたりともうそれはそれは大接近だったので、コロナになってもおかしくありません。その夜は常備薬の葛根湯を飲んで就寝。なんと翌朝はかっこんと元気になっていました！！葛根湯は本当に風の引き初めには適薬です！！！この冬もコロナが違う形で接近と聞いております。どうぞ皆さま健康でよい秋、そして冬をお迎えください。今回、初めて投稿させていただきましたがお付き合いいただきました皆さま、ありがとうございました。またお会いできるのを楽しみにしています。

最後に私のトレーナーさんが誕生日の記念に作ってくれた筋トレ動画をお時間があるときにご覧ください。
自分でもトレーニングの様子が見れて本当に嬉しく良い記念になりました。
今日できたことが明日はできないという日々、兎に角『今日が一番若い！』を信じその時を頑張っていければ最高です！

https://youtu.be/8Q-00RxCW4Y　←こちらがリンクです。

英国春秋俳壇

エリオットつや子

ラベンダーの花

近ごろはよく降る雨や梨の花

トラ刈りの庭と動かぬ草刈機

ラベンダー畑に坊様極楽か

蜂ぶんぶんラベンダーと大空と

ラベンダー花束にさえ蜂すがる

じゃがいもの花淡くして五角形

かぼちゃにも雄花雌花のあるを知る

短夜の猫はすまして朝帰り

緑蔭のまだ子等の来ぬすべり台

二度咲きの花々摘んでお盆かな

女王の最大の後悔の地

～涙で曇ったウェールズの旧炭坑町～

加藤美喜

８月の週末の昼下がり、「非通知」の電話が携帯にかかってきた。普段は非通知には出ないのだが、弊社ロンドン支局の閉鎖と自分の帰国準備に追われていた折、どこかの業者からかもしれないと思い、渋々出た。「ミキ・カトウさんですか。〇〇（地名聞き取れず）の警察です」。え、警察？「あなたのバンクカードを預かっています」。ん？財布は手元にあるし、酔っぱらって千鳥足で帰った記憶も（この数日は）ない。もしかして警察を騙った詐欺電話かと思い始めたところ、向こうが続けた。「あなたの記者証と名刺もある。最近南ウェールズに来なかったか？」

あっ…。行きました。南ウェールズ。はっとしてカバンを見ると、ピンクの名刺入れがない。そういえば中に MONZO のカードを１枚移していた。「すぐに取りに行きます。どこの警察署ですか？」。ウェールズ語の難しい地名のスペリングを一字一字言ってもらい、書き留めた。

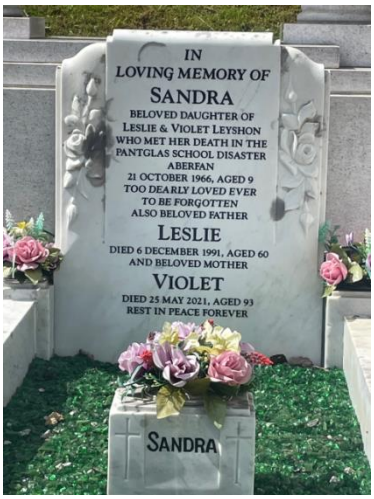
この電話の２日前、私は南ウェールズの Aberfan に行った。発音はアババンに聞こえるが、アバファン、アベルヴァン、などの日本語表記もある。カーディフから北へ約３０マイルの山あいに佇む、小さな旧炭坑の村だ。２年間のロンドン赴任の最終盤に、私はどうしてもここに行っておきたかった。

1966 年 10 月 21 日、Aberfan は英国の歴史に刻まれる大惨事に見舞われた。石炭の採掘によって生じる岩石廃棄物を積み上げた巨大な山（ボタ山）が崩れ、地元の小学校をのみ込んだ。116 人の児童を含む計 144 人が生き埋めとなり、犠牲になった。連日降り注いだ大雨が直接の原因だが、安全をおろそかにして規定を遙かに超える高さに廃棄物を積み上げ続けたことが背景にあった。英国史上最悪の産業事故だった。

私はこの惨事をドラマ「The Crown」で知った。ご存じ故エリザベス２世の治世と王室の人間ドラマを描いた人気シリーズだ。Aberfan の大惨事はシーズン３の第３話で描かれている。ドラマでは、当時のハロルド・ウィルソン首相（労働党）が、女王に現地の慰問を要請する。しかし女王は「私が行くと救助活動の妨げになる」と言って訪問を控えた。その間、妹のマーガレット王女の夫で写真家のアンソニー・アームストロング＝ジョーンズ氏や、夫のフィリップ殿下が先に現地を訪れてその惨状に言葉を失った。女王が現地を訪問しないことに対し、ウェールズだけでなく労働者階級に対する冷たい仕打ちだとの世の中の批判が徐々に高まった。結局、女王は事故から８日後の 10 月 29 日に現地を慰問する。女王は普

段から感情をあまり表に出さず、それが君主として正しいことだと信じていたとされるが、ドラマでは側近から「ここはウェールズです。感情を示すことは適切なだけでなく、期待されているのです」と説明される。
ドラマには当然脚色もあるだろう。救助活動の妨げとなるから訪問を控えたというのは賢明にも思える。しかし制作した BBC によると、女王は Aberfan の惨事に対する自らの対応の遅れを、「君主として最大の後悔」と悔やみ、その後何度もこの地を訪れた。その回数は王室で最多だったという。
住民らが小高い丘の斜面にわが子の棺を埋葬するシーンは、その場面で歌われる賛美歌と共に、胸を打った。現地は今どうなっているのだろう。英国史に刻まれる悲劇の現場と「女王の最大の後悔の地」を、この目で見てみたかった。

ロンドン・パディントンからカーディフまで電車で約２時間。そこから最寄り駅の Merthyr Vale 駅まで、ローカル線で直通なら約５０分、乗り継ぎなら１時間半。駅からさらに徒歩で約１マイル、ひっそりとした住宅街を抜けると Aberfan のメモリアルガーデンがあった。地元の子どもたちが植えた木に並んで、1997 年 5 月に女王が植えた木があり、すくすくと成長していた。メモリアルガーデンを一旦出て、丘の上に続く道をまた 15 分くらい歩くと、斜面に白い墓石がずらりと並ぶ墓地があった。この墓地は麓からも見えた。１つ１つの墓石に近づくと、最愛の子を失った親たちのメッセージが刻まれていた。多くの子が 7 歳から 10 歳で命を落とした。事故が起きたのはハーフターム前の最後の授業の日だった。



「この命が尽きるまで、あなたを１日も決して忘れない」「私達に授かった小さな花。天国で花開いてください」「天国で再会するまで、イエスの腕の中で安らかに過ごして」。１つ１つのメッセージに子を思う親の愛の強さを感じながら、目の前がどんどん滲んでいった。
事故後、数十年の時を経て両親も眠りに付いた。「ようやく一緒になれた」とのメッセージとともに、子の隣に両親の名前が刻まれた多くの墓の前で、私は嗚咽が止まらなくなった。周囲を見渡すと、かつて炭坑だった面影はどこにもない。英国各地に炭坑があった時代、経済優先の政治や社会が、子どもたちの命を犠牲にしてこのような悲劇を生んだ。決して忘れてはいけないと思った。静かな谷の中で、そよ風に吹かれてしばし立ち尽くした。時がかつての悲しみを包み、ただ穏やかな緑の山々が広がっていた。

今回、Aberfan を訪れるに当たって、英国メディアの優れた報道にも出合った。地元の Wales Online は事故の詳細な経緯や救出活動、遺族の声、生存者のその後の道のりなどを丹念に追い、今もウェブサイトで特集を残していた。日本では事件事故の被害者の報道はプライバシーを重視して匿名になるケースが多い。そもそも警察が実名を発表しない傾向にある。そっとしておけ、という社会の暗黙の圧力のようなものも感じる。
英国の報道を見ていて思うのは、実名の力だ。実名で報じるからこそ、その人がどんな人だったのか、

単なる「小学生」や「８歳男児」という記号ではなく、固有の名前を持った人々の物語が強く心に刻まれる。写真があればなおさらその表情が強く印象に残る。強く印象に残るからこそ、生身の人間の命が奪われた重みが伝わる。命の重みが多くの人の心に響けば、ひいては再発防止や法律、政策の改善にもつながり、社会を変える影響力が生まれる。私は日本で被害者報道に長く携わっていたが、改めて丁寧に１人１人の命をきちんと報じることの意味や意義について考えさせられた。

墓地に刻まれた多くの名前、写真、メッセージの強さには実に胸を打たれた。墓地からの帰り道、まだ視界がぼやけたまま、余韻に浸りながらふらふらと駅まで歩いた。何度もバッグからハンカチを出し入れして、目と鼻を拭いた。おそらく、名刺入れはその時に落としたのだろう。電話をくれた警察官によると、誰かが駅の近くで拾い、届けてくれたのだという。

警察署は、その Merthyr Vale 駅からさらに３駅北にある終点、Merthyr Tydfil 駅から徒歩 15 分の所にあった。あれだけの余韻に浸ったこの山あいの地に、２日後にまた来ることになるとはついぞ思わなかった。不注意を嘆きながらてくてくと歩いて署に行き、受付で名前を言うと、無事にピンクの名刺入れが返ってきた。

ウェールズ出身のご主人を持つ知人のＹ子さんによると、Merthyr は「殉職者」の意味で、その次に来るのは人の名前だという。敬虔な人々がつくった土地なのだろうか。

それにしても英国で銀行カードを落として無傷で帰ってくるとは思わなかった。恥ずかしながら、私は東京で財布を丸ごと落としたことがあり、携帯は少なくとも５、６回はなくしたことがあるが、いずれも手元に戻ってきてさすが日本だと感心した。しかし、ＮＹに住んでいた時は財布をタクシーに忘れて戻ってこなかったし、ロンドンでも tube で家のカギを落として戻ってこなかった（←どれだけ落としているのか）。ロンドンでは携帯電話を盗まれた知人を少なくとも３人知っている。今回名刺入れを落としたのがロンドンだったら、まず返ってこなかっただろうと思える。その意味でも、ウェールズへの好印象が強まった。

女王の最大の後悔の地を訪れたついでに、おまけでウェールズの小さな村の良さを知ってしまった。警察署で受け付けの女性に丁重に御礼を言い、すがすがしい気分で署を出た。グーグルマップで帰り道を検索しながら、この署の review 欄に５つ星を上げたくなった。ついでに他の人はどんな評価を付けているのだろう。そう思っていくつか読むと、「ローカルガイド」なる人のこんな投稿があった。「ナイスな bed and breakfast。隣の部屋のゲストが少しうるさかったが、仕方ない。スタッフは素晴らしく、コーヒーとグルメな食事。Cost of living crisis のさなか、１泊をお勧めする」。ウェールズの人はユーモアセンスも抜群だ。

黄金の都市、サラマンカ

小川のり子

サラマンカの４月はすでに眩しい夏の陽ざしに溢れ、黄鉄鉱石で造られた街並みがその名もほしいまま、黄金色に輝いていた。帽子はおろかサングラスも携えずロンドンを後にしたのを悔やみながらも、まるでイカルスのように太陽をめざし、降り注ぐ光の中を歩き続けた。遠い記憶を頼りに右に左と路地を折れ、見覚えのある貝の家(Casa de las Conchas)が目前に現れた時は、思わず、昔馴染みに出会ったようで、「お久しぶり！」と声をかけてしまった。半世紀ぶりの再訪とは言え、見知らぬ土地に足を踏み入れてしまったのではと、落胆していた矢先のこと。この外壁にホタテ貝の装飾がある建物は、私にとってまさに巡礼の地、サラマンカそのものであった。

１６世紀に宮廷貴族の邸として建設され、ゴシック、ルネッサンス、ムデハル様式の混淆がバランスよく調和された豪邸。この直線と曲線が微妙に入り混じる美しい建物は、現在、公立図書館として利用されている。

紋章のある入り口をくぐるとそこは玄関ホール、白大理石の列柱に支えられた、繊細で複雑な装飾のある幾層ものアーチに周りを囲まれ、中ほどに鉄製の釣瓶がかかる井戸があった。現在は使われていないようだが、かつて訪問客に冷たい水を提供してくれたのだろう。奥の階段を上がると吹き抜けの天井から、まるで四角に切り取られたような紺碧の空とその中に浮かぶ教会の尖塔が、一幅の絵のごとく忽然と現れた。回廊の壁、手すり、天井周辺はすべて複雑な装飾が施され、その細やかで美しい仕上がりに思わず感嘆の声を上げてしまう。ここから眺められる外壁には悪霊払いのガーゴイルが、少々ユーモラスな顔を覗かせていた。きっと風化でおどろおどろしさが薄れてしまったのだろう。

案内文の中に面白い箇所があった。この 300 個近くの貝殻の中のどれかに“宝石が隠されている”と記録に残されているそうだ。事前に補償金を払い見つけられたら、お金も戻り、宝石も自分のものとなる。しかし見つけることが出来なかったらすべてが無駄になるというもの。何だか眉唾ものだが、どんな宝石が隠されているのだろうかと気にもなった。
丁度写真展の最中で、回廊の周りに飾られた数々は、奇抜な化粧や服装、大胆なポーズのポートレートがずらり並ぶ。強力なサラマンカの陽光がこの斬新な構図を生み出させたのかも知れない。

マドリッドから北西へ２１３キロ、鉄道で２時間、自国の首都よりも隣国、ポルトガルに近いサラマンカの歴史は古い。紀元前３世紀にはハンニバルに占拠され、あとローマンとイスラム支配がしばらく続き、１１世紀後半キリスト教勢力に奪回されてより現在に至るとあるが、2,000 年以上前から栄えている街は、そう多くはない。

“貝の家”の向かいにクレレシアの塔(Torres de la Clerecia))がある。かつてはイエズス会の教会および神学校であったそうだが、現在はポンティフィシア大学の一部である。“天へのはしご”と呼ばれる数え切れぬ階段を登ると、突然眼下にサラマンカの街並みが広がった。場所を変えるたびに大聖堂のドームも鐘楼も、様々な教会の尖塔も、広場も、赤い屋根瓦の家々がまるで回り灯篭のように現れては消え、また現れた。鳥瞰図とはよく言ったもので、塔の上から四方に広がるこれらを眺めるのは、まるで鳥になったような気にさせる。展望台をぐるりと回りふと目前に迫る教会の鐘楼に目をやると、その傍にかなり大きな鳥が巣を造っていた。親鳥らしいのが巣のそばに立っていたが、中には何匹かのひな鳥がいるらしく、小さい頭がひょこひょこと見え隠れしている。どうも日本の鶴に似ているが・・・、いや、もしかしたらコウノトリかもしれないと思い付く。世界的に絶滅の危機

に瀕すると言われる鳥がすぐ目前にいるかと思えば、つい興奮してしまった。カメラを向けている私に、「コウノトリですよ。こんなに近くで見られるのは素晴らしいですね！」と声をかけて来た初老の男性がいた。イギリス人のように思えたが、盛んにシャッターを切っている私を見て、バード・ウォッチャーの愛好家と思ったのか。この後、サラマンカ滞在中、コウノトリが小枝をくちばしには見かけたが、赤ん坊を運んでいるのにはお目にかかることはなかった。この伝説はてっきりヨーロッパだけのものかと思っていたら、実は日本にもあるそうだ。ただし、どのような経路かは不明で、ドイツにある伝説が少々変形して伝わったらしい。

今回初めてローマ橋（Puente Romano）を訪れた。２６の半円アーチで支えられたシンプルで堅固な造りながら、それでいて優美なデザインに感嘆する。私はローマ人の遺した数々の偉業を何かにつけて称賛したくなるが、特に、今なお残る道路、城壁、アクアダクト、そして橋にはその思いがより強く感じられる。この橋は、トラヤヌス帝の治世とあるので紀元１世紀の建造物だろうか。今まで修復作業はあったとしても原型に沿ってなされたと考えれば、その昔、戦争の合間に、このような橋を架け、道を造り、馬を走らせ郵便網を敷き、水道橋、浴場や、闘技場まで建てたローマンに乾杯したくなる。このあと近くのセゴビアにも足を運んだが、そこには今でも使用中だと言われる、ローマ人が建設した巨大な２層建てのアクアダクトがある。もっともここを流れる水を見ることは出来なかったが。

サラマンカの午後の陽ざしは鋭く身体を刺し通すばかりで、どこか日陰と思うが、橋の上にはそんなものがあるはずはない。しかし、水量は少ないがこの橋の下にはトルメス川が流れ、何組かのカモの親子がのんびりと泳いでいた。
この川は国境を越えポルトガルに入りしばらくすると大河となり、ドウロと名前を変え大西洋に注いでいる。第二ポエニ戦争・ザマの戦いでカルタゴに勝利、全イベリア半島を手中に収めたローマンが、川伝いに大西洋に至り、コロンブスに先駆け未踏の新大陸を発見していたら・・・と地図を見ながらあれこれ想像するのは旅先での一興。
先程から空中を旋回していたコウノトリの一羽が舞い降りてきて、川中で辛抱強く餌を狙っていた。橋の前方の高台にサラマンカの旧市街が、まるで時間を停止させたかのように、中世そのままの威容を誇っていた。高所から眺めるサラマンカも良いが、下から見上げるサラマンカも悪くはない。ここから見える尖塔の一つは昨日見たコウノトリの巣がある鐘楼かもしれない。

大聖堂のすぐ近く、樹々の茂るアナヤ広場は日陰を求める人と鳩の避難所。物欲しげな数羽の鳩を侍らせて一人の青年がパンを食べていた。目が合ったので、「何処から？　学生？」と話しかけた。アイルランド人で経済学を勉強中との返事。それなら距離的に近いロンドンで勉強すれば、と一瞬思ったが、偏差値がどうの、スペイン語がこうのとの説明で、大きなお世話は口に出さず飲み込んだ。遠く離れた知らない土地で学ぶ方が、知識はより身に入るのかも知れない。

そろそろ午後の授業の始まる時間。すぐ前にある大学の入り口に向けて学生たちが三々五々と集まって来る。つられて中に入るとそこは石畳の大きなホールで、壁には赤字で VITOR のモノグラムのある、卒業生ネーム入りのプラークが沢山かかっていた。数人の学生が雑談していたが授業前のようなので、少し聞いてみたいことがあるがと話しかけてみた。スペイン語の会話が一瞬止み、驚いたような視線が私に集中したが、皆は俄然興味を示した。「紀元前からこの街が繁栄している理由は？」がその質問。港から遠い、大河がない、交通の要路とも思えない、自然要塞がある地形でもない、メセタ（台地）が農耕に適しているとも思われない、金銀銅などを産出する鉱山があったとは聞かない・・・なのにハンニバルに征服され、その後ローマンがやって来て、橋を架け、城壁を造り・・・などを議論の合間に挟みこんだ。ああだ、こうだと各自が喋り出すのだが、一向に要領を得ない。その時一人の学生がやって来て皆の意見を纏めてくれた。結局最後に、人が集まってくる金目のものとして、昔は近くに “鉱山”でもあったのではないか？

に落ち着いた。しばらくすると、開け放された教室では授業が始まり、５０人ほどの学生が、大きなスクリーンを前にした教授の話に聞き入っていた。出口に向かう途中で２～３の学生に出会ったので、「遅刻、もう始まっているわよ！」と言うと、彼らは首をすくめ教室に急いだ。ロンドンに戻り色々調べてみたが、その昔、サラマンカ近郊に鉱山があり金・銀・銅などが産出され、人々が集まって来たと言う記述には出会うことはなかった。

因みにサラマンカ大学はボローニャ大学、オックスフォード大学に続き３番目に古く、1134 年の創設と言われる。丁度日本では平安時代後期で、平仮名・片仮名が発明され国文学が繁栄した時代。当初もしこの大学に文学部があったとすれば、生徒たちは世界最古の長編小説と言われる、「源氏物語」に触れる機会はあったかもしれない。そして「ハポンのドン・ファン物語は素晴らしい」と絶賛したのでは。スペイン産のドン・ファン物語、ティルソ・デ・モリーナ作に先立つこと 500 年近くも前の話になるのだが。こんな途方もない想像を楽しめるのも旅の解放感からかもと思いつつ、大学を後にした。

ロンドンのナショナルギャラリーにあるジュセッペ・リベラの「嘆きの声」(The Lamentation) は好きな絵の一つ。十字架から降下されたキリストの遺体を囲み、聖母、セント・ジョンそしてマグダラのマリアの悲嘆にくれる姿が、光と影の微妙な陰影を対比させながら写実的に描かれている。あたかも彼らの哀しみが画像を通して湧き上がって来るようで、観る者の心にひしひしと迫ってくるものがある。そのリベラの有名な「無原罪の御宿り」の祭壇画がこの街にあると教えてくれたのは、マヨール広場にあるツーリスト・センターでのこと。その教会は Iglesia de la Purisima Concepcion と呼ばれ、英語に訳せばそのものずばりの Church of the Immaculate Conception、無原罪の御宿り教会。

大きく丸印を付けてもらった地図を片手にくだんの教会に一途急行。入り口に２時に閉門のサインにはまだ３０分あることを知り、急いで中に入る。
その祭壇画は、複雑な浮彫が施された白大理石で縁取りされ、正面に飾られていた。
白いチュニックに濃紺のガウンを羽織った聖母が胸を抱くように両手をクロスさせ、身体を幾分か後方に傾げて天上を仰ぎ見る立ち姿。足元には下弦の月が描かれている。天上からはグレイの上布を付けた全能の神が半身をのりだすようにしながら、右手をかざし、その下方に白鳩を従え、聖母に祝福を与える。神と聖母を取り巻く天使たちは花をかざしオリーブの枝をかざしてこの祝福を寿ぐ。画面全体に黄金色のまばゆいばかりの光があふれ、この祭壇画にひざまずく信者達をさぞかし至福の思いにさせることだろう・・・と思わせた。まさに絵で読む聖書の一ページである。

この“無原罪のお宿り”と言うカソリックの教義は、“*マリアは罪無くして（原罪を受け継がず）母アンナの体内に宿り生れた*”　と言うものだそうだ。しかし、これは処女懐胎につながり、クリスチャンでもない私に、「それは無理よね！」と言わせてしまう。が、理屈はさておき祭壇画は素晴らしく、閉門までの残りの時間を存分に楽しませてくれるものだった。
旅先で訪れた美術館や教会は数知れず、そこで出会った宗教画や祭壇画もまた数えきれない。その度にクリスチャン文化に触れるのは当然とは言え、信者でもない私が宗教画を通じて得られた聖書の教えは、知識として非常に大きい。そして感動を呼ぶ画像は知識以上の何かを私に与えてくれているのかも知れない。

サラマンカの旅からあっという間に数カ月の月日が流れていった。陽光に耀く大聖堂のドームや街並み、コウノトリが舞う紺碧の空などを思い浮かべながら、また訪れる機会があることを願った。

英国春秋歌壇

バロー典子

はなやぐ心

こぶし木の　裸の枝に　緑の芽
まだ来ぬ春に　はなやぐ心

浅く濃く　みどりに映える丘陵の
野辺うるわしや　コッツウォルズ

生い茂り　枝の隙間の　青空を
縮めゆくなり　万緑パワー

ふるさとの　妹夫婦　来英し
あっという間に　過ぎし半月

鳩一羽　倒れ動かぬ　公園に
舞い降り去らぬ　他の一羽あり

７０代　戴冠されし　国王の
老いて優しき　御代に幸あれ

夫（つま）病みて　緊急手術と　なりし日に
遠路の息子　われに寄り添う

幸せは　記憶戻りし　夫（つま）といて
胸に詰まりし　感謝のことば

風もなく　音なく銀杏　散りゆきて
根元に黄色の　円描きたり

いつの日も　すべてを受けて　揺るがざる
大樹の姿　見上げ来し日々

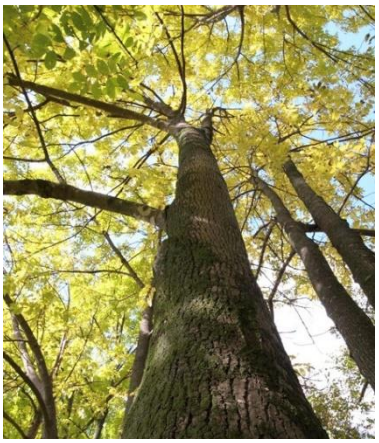
季節を告げる空飛ぶ妖精たち

ビドル　惠

北海道の 10 月は広葉樹の葉が黄や赤に染まって散り始め、人々はやがて到来する冬に備えてストーブや暖房器具の点検をしたり、一冬分の灯油の注文や車の冬タイヤへの交換を何時にするか？と気にする季節だ。そんな 10 月も末の穏やかに晴れた日の夕暮れ、辺り一面に飛翔する白い小さな虫を目にする事がある。これは“雪虫”と呼ばれるトドノネ・オオワタムシであることは『妖精の訪れる裏庭で』でも書いたが、ここでもう少し詳しく説明したいと思う。

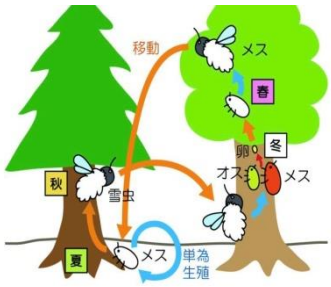
『冬の到来を知らせる妖精、雪虫』

トドノネ・オオワタムシはアブラムシの仲間で、夏の間はトドマツの根元(菌根)に寄生してコロニーを作ったり、身体から分泌する蜜の甘露を好む蟻に保護されて、地中に生息している。それが秋の繁殖/越冬期を迎えると、透明な翅と白い綿毛(やはり身体から分泌される蝋物質)を持つ雌の有翅虫(雪虫)に成長して地上に現れ、ヤチダモの木に向かって一斉に飛び立つ。



ヤチダモは(英名 Manchurian Ash)北海道に自生する落葉広葉樹の大木で、街路樹としても沢山植えられているから、トドマツの森から市街地へ向かって大量の雪虫が飛んで来る事になる。この時、自転車に乗っていたり走っていたり、大口を開けて笑っていたりすると、目や口、鼻に吸い込まれて入って来るので、注意が必要だ(味も害も無いですけどね)。綿毛に包まれた身体は 3～5mm と非常に小さく、それが微風に乗ってゆっくりと飛翔/降下する様は実に幻想的で、あたかも本物の雪が舞っているように見えるから、「あら、雪？」「いや、雪虫だわ～」と、掌に受けて初めて分かるのである。

ヤチダモの網目状にゴツゴツとした幹に辿り着いた雪虫達は、雌雄の有性虫(雌が橙、雄が緑色)を其々1 匹づつ産出して生き絶える。産出された小さな有性虫は交尾の後、樹皮の隙間に潜り込んで受精卵を一個産み付けると、これも間も無く死んでしまう。そして、樹皮の間で越冬した卵は翌年の春に孵化し、ヤチダモの若葉の養分を吸って育った後、5 月頃に“幹母”という丸々とした成虫になる。幹母は単為生殖によって多数の幼虫を産出し、それが再び有翅虫に成長してトドマツの根元に帰るのだ。



アブラムシと聞くと険しい顔をされる方も居られるかも知れないが、一年(1 サイクル)に何回も生まれ変わって、生命を次の世代に繋いで行く不思議な虫だし、有翅虫(雪虫)は人の手に触れたり、或いは何処かに一旦付着してしまうと、自力ではもう飛び立てない程に弱くて繊細だ。本州北部にも同じ虫が生息するそうだが、飛行密度が低い為にあまり目立たず、呼び名も違っている。秋の短い北海道では、非常に高い密度の“雪虫の群飛”が見られ、その後間もなく初雪が降る事から“冬の到来を知らせる妖精”と呼ばれている。

『雪の精、シマエナガ』

まん丸に膨らんだ真っ白い体に、ポチポチッと付いた黒い目と嘴が可愛いシマエナガは、その姿を冬に見せてくれるので“雪の精”、或いは“空飛ぶ豆大福”などと呼ばれて愛されている。全長約 14cm、その半分を長い尾羽が占める為に小さい身体は 10g にも満たず、日本でも最少級の小鳥である。もう想

像頂けるように体型が水を掬う柄長に似ているので、この呼び名が付いている。では、どうして縞柄でも無いのにシマエナガなのか？というと、これは“島”の意味で、大陸ではなく北海道という島に生息するから。

シマエナガの食性は主に昆虫やその幼虫、アブラムシ(雪虫)などで、冬には凍った樹液の氷柱をホバーリングして舐めたりするが、果実や種子はあまり食べない。北海道の広い地域に分布し、普段は森林地帯や自然公園などに生息しているが、冬の訪れと共に比較的暖かい人里や、街中の公園/街路樹にやって来る。とは言え小さくて敏捷に動き回るので、その姿を見たい時は鳴き声を覚える方が先だ。「チッチッチー」「ジュルルジュリッ」という声のする方向を頼りに目で追っていくと可能性も高くなる。

アイヌ語ではウパシチリ(雪の鳥)で、この鳥が群れると雪が降る～と言われていたそうだ。シマエナガは繁殖期以外は群れで行動する方を好み、木から木へ移動したり、寒い夜は固まって眠ったり、個よりも集団、お互いに支え合って生きている印象を受ける。身体の小さい割に一度に 8～10 個ぐらいの卵を産み、巣立ちしたばかりの雛たちが一本の枝に“おしくらまんじゅう”して並び、餌を運んで来る親鳥を待つ様子は、正に“シマエナガの串団子”である。

この鳥の魅力は、羽毛が他の鳥よりもフワフワとしている事。冬になって気温が下がると、その羽毛を保温の為に膨らますので、益々モフモフ感に溢れて縫いぐるみの様になるところだ。北海道の観光キャンペーン・キャラとしても大人気で、お土産グッズや写真集、カレンダーの類は元より、スイーツに至っては、シマエナガを模った砂糖に始まって、饅頭、パン、練り切り、串団子、柏餅と止まるところを知らない。

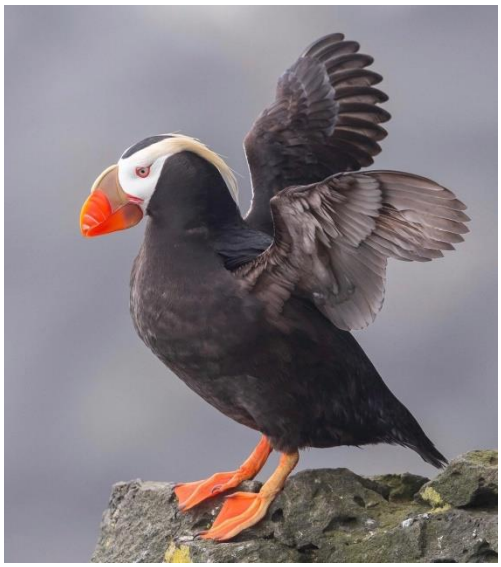
『オロロンと鳴く、幻の海鳥』

北海道の日本海側北部、石狩市から天塩町までを結ぶ国道 231 号と 232 号線は、昔の鰊漁が盛んだった頃を偲んで“日本海オロロン・ライン”と呼ばれている。オロロンは北極圏の海に広く生息するウミガラス (英名 Common Guillemots)の愛称で、昔はこの辺りに冬から春にかけて、越冬/繁殖の為に大量に飛来したそうだ。体長 40cm、体重 1～1.6kg、頭部や脚、背側が黒く、腹側が白い。水掻きのある足は尾の近くに位置する為、陸上で直立歩行する姿はペンギンに似ている。飛ぶより泳ぎを得意とし、採餌は水中に約 50m も潜って、ニシン、イカナゴ、ギンポ、シシャモ、イカなどを捕まえる。

鰊漁のピークを迎える 1950 年代までは毎年約 40,000 羽が飛来し、特に石狩湾北部の海岸線と宗谷/稚内の離島の、険しい岸壁や岩棚に群れて巣作りしたという(卵は洋梨型なので、誤って転がっても円を描くだけで落下しない)。鳴き声から地元の人はオロロン鳥と呼び、冬の到来を知らせる鳥として親しんでいたそうだが、餌資源の減少と網漁による混獲、天敵のハシブトガラスやセグロカモメ(Herring gull)が、人間の廃棄物を食して増え過ぎた為に、殆ど姿を見せる事は無くなってしまった。

オロロン鳥は絶滅危惧種の保護対象で、天売島の断崖絶壁に鳥獣保護区が設けられたが、当初は数ツガイを観測するのみだった。その後、群れで巣作りする習性を利用したデコイ(擬似模型)の設置や、鳴き声をスピーカーで流すなどの呼び寄せも試みられ、2006 年にやっと、52 羽の飛来と 24 羽の雛が誕生するに至っている。アイヌ語ではモシルンチカ(島に居る鳥)、なんと可愛らしい響きの呼び名だろう。その姿をもっと身近に見られる日の来る事を願うばかりだ。

『花魁鳥と呼ばれる、エトピリカ』



エトピリカはアイヌ語で“美しい嘴”の意味、その名前の通り鮮やかな橙色の嘴を持っている。和名はウミスズメ(Tufted puffin)と言い、ちょっと目には北大西洋で見られるニシツノメドリ(Puffin)に似ているが別種である。一年の大半をオホーツク海やベーリング海の外洋に浮かんで過ごし、夏にアラスカ、カナダ、シベリア、千島列島、そして北海道東部の沿岸離島に繁殖の為にやって来る。

体長 38～40cm、体重 660～900g、翼開長 60～70cm で、冬の間は体全体が黒っぽく顔も灰色だが、夏の繁殖期を迎えると顔の部分が白くなり、太くて縦に平らな橙色の嘴と脚が色味を増す。そして目の上から、黄白色の飾り羽が伸長して後方に垂れるので、その美しい風貌から“花魁鳥”と呼ばれている。

短い翼をはためかせて海面近くを飛び、翼と水掻きのある足を使って水深 10～40m 辺りまで潜水し、イカナゴやニシンなどの小魚、イカやオキアミなどを捕食する。4～8 月の繁殖期になるとキツネの寄り付けない険しい断崖に集まって、地面に掘った浅い穴や岩の隙間などに、草や羽毛を敷いて巣とする(産卵は一個)。雄雌交代で 40～50 日間抱卵し、孵化後は 45～55 日で巣立つ。

かつてエトピリカは道東の島々で大量に繁殖していたそうで、この鳥がやって来ると間もなく北海道にも暑い夏の到来だった。分布域が広いので生息数も多いと考えられていたが、温暖化による海水温の上昇と、流し網や底刺し網漁による混獲。或いはサハリン海域での原油や化学薬品の流出事故などで、その数は激減している。現在は厚岸町から根室市沿岸の離島(大黒島、モユルリ島、ユルリ島)や、浜中町の小島などで少数観察されているのみだ。1993 年に国内希少野生動植物に指定された。

『赤い帽子を被ったカラス？ クマゲラ』

クマゲラは名前に由来する通り、日本に生息するキツツキ科の中で最大級。体長 40～45cm、開翼長は 60～66cm もあり、目の輪郭と嘴、脚が白っぽい他は全身真っ黒で、雄は額から後頭部、雌は頭頂部に鮮やかな赤色が入る為に、“赤い帽子を被ったカラス”とも呼ばれている。ユーラシア大陸とアジアの北部、日本国内では北海道と東北の一部にのみ生息する留鳥である。常緑針葉樹と落葉紅葉樹の混合林を好み、食性は雑食で主に木の幹に巣食う蟻やキクイムシの幼虫、果物などを食する。鳴き声は大きくて「キョーン」「キョーン」と区切る様に甲高く鳴き、上下に波を描くキツツキ特有の波型飛行をする際に「コロコロコロ」と可愛らしく鳴く。

4～5 月頃の繁殖期になると、天敵の蛇やクロテンが寄りつけないトドマツや白樺などの大樹(枝の無い 10 メートル以上の高い位置)に、“船堀型”という直径 25cm、深さ 60cm 程の楕円形の穴を開けて巣とする。一度に 2～4 個の卵を産み、抱卵は雄雌交代で 12～14 日間、孵化後の雛は 24～30 日で巣立つ。1996 年に国の天然記念物に指定されたが、森林伐採や採食地の破壊、繁殖期に人の侵入による撹乱などで生息数は激減し、北海道で約 600 羽、東北で 100 羽程度しか残っていない絶滅危惧種である。

アイヌ語ではチプタチカップ(舟を彫る鳥)と呼ばれ、丸木舟の作り方をこの鳥から学んだとされている。又、山ではヒグマの居場所を教えてくれたり、道案内をしてくれる神様としても崇められているが、実際のクマゲラは人に慣れず、野鳥好きがウォッチングの為に山に入っても(繁殖期以外に限られる)、人を見ると木の裏側に回って逃げ隠れ、その姿を見せてくれる事は滅多に無いそうだ。

『神様の耳を持つ、ハクチョウ』

真っ白い白鳥が水面に漂う姿は、詩人が詠うほど高貴で優雅だし、ツガイが胸を付けて互いを見つめ合う姿はハート型と、あまりにも美しくて印象的だ。日本で見られる白鳥はオオハクチョウとコハクチョウの二種類で、10 月～11 月頃にユーラシア大陸の北極圏から越冬の為に南下し、翌春の 3～4 月に再び北上する渡り鳥である。北海道はその中継寄留地にあたるので、春と秋の季節の変わり目に 2 回、美しい白鳥の大群を見る事が出来る。

オオハクチョウはその名のとおり、全長 140～160cm、翼開長 210～240cm、体重 8～15kg と超大型で、成鳥は全身が真っ白い羽毛に覆われ、黒と黄色の嘴を持つ。別名ナキハクチョウとも呼ばれ「コォーッ」と甲高く鳴く。夏季にシベリア大陸のタイガ(針葉樹林帯)で繁殖し、秋になるとサハリン(樺太)を経て北海道の東部、特に網走の濤沸(トウフツ)湖や根室の風蓮(フウレン)湖、釧路の屈斜路(クッシャロ)湖などに寄留した後、最終越冬地である東北地方まで約 3,000km の旅をする。

コハクチョウは全長 120～140cm、翼開長 180～220cm、体重 5～11kg とやや小ぶりだが、体や嘴の色も殆どオオハクチョウと変わらない。シベリア大陸の極北ツンドラ地帯(永久凍土地)で繁殖し、マガンやカモなど他の渡鳥と共にロシア・マガダン地方を南下して、サハリン(樺太)北部、アムール川下流域を経た内陸ルートか、カムチャッカ半島から千島列島を辿る、オホーツク海洋ルートを通って北海道に到着し、更に最終越冬地である東北南部や本州中央部まで、約 4,000km 以上の長旅をする。北海道での最大の寄留地は、宗谷・浜頓別のクッチャロ湖と稚内の大沼で、何方もラルサール条約登録地(自然の儘で人工的な餌付けなどをしない)に指定されており、約 20,000 羽(国内で越冬するコハクチョウの半分以上)が飛来する。

白鳥は離陸時に助走を必要とするので、開けた広い水面を持つ大河川や湖沼、水田、潟湖、入江などを生息地とする。主に水草の葉や茎、地下茎、果実、草の穂、落ち穂、マコモなどの植物食だが、時に昆虫や甲殻類、貝などを食べる事もある。ギザギザの付いた平たい嘴を使って草の穂をしごいたり、水底の草や堆積物を首を伸ばして水中に上半身ごと入れ、逆立ちする様に採食する。

アイヌ語ではレタッチリ/ペケッチカ(何方も白い鳥の意味)と呼び、飛来すると“鮭の遡上する秋”を、北へ飛び去る時は、“暖かい春の到来”を知らせてくれる鳥として尊んでいた。又、白鳥が村の上を飛んでいる時は「神様が聴いているのだから、何でもかんでも無闇に喋るものではない」と戒められていたし、明治に入植して来た開拓民が銃で白鳥狩りするのを嘆き、「やたらに銃で撃つと、人に取り憑く神様だ」と言って脅かしたりしていたようだ。古事記にも『ヤマトタケルの霊魂は、白鳥になって飛び去った』と記されているから、尊い鳥と崇めておいた方が良さそうである。

◎ 因みに英国で見られる“王室が管理する白鳥”は、主にヨーロッパや中央アジアに生息するコブハクチョウという種で、体格はオオハクチョウと粗同じだが、鳴き声を持たない Mute Swan である。嘴が黒とオレンジ色で黒い部分にコブのあるのが特徴だ。

広島カープ

石山望

皆さま、日本のプロ野球、広島カープってご存知ですよね。

そう、広島にある、真っ赤っかのプロ球団です。この球団は、日本 12 球団の中でも、特殊。
まあ、正式には「広島東洋カープ」と言いますから、マツダの東洋工業が肩入れしているんでしょうが、基本的には、広島市民が持っている球団です。他の球団は、大きな企業が背後についていることは、皆様、ご存知だと思います。
それに、この広島のニックネームには、他の球団のそれと異なり、唯一、語尾に「S」がついていません。その理由はもちろん、CARP が鯉という魚で、単複同形であるため。

発足は、戦後の 1950 年。その前年に、日本プロ野球の 2 リーグ分裂話が出た時、広島にプロ球団を作ろうという機運が高まりました。「それは、いい。是非広島にもプロ球団を！」と話は急テンポでまとまりました。もともと、広島は野球の盛んなところですし、それに何しろ、その 5 年前、広島に原爆投下。それによって、この町は、壊滅状態に陥り、県民の心も、疲労、荒廃していましたからね。何か、人々に希望を与えるものが欲しかったのです。
でも、新球団を、何もないところから新たに作るとなると、それはそれは大変です。
まず球場ですね。そして何と言っても「資金」です。選手は、その辺りからかき集めてきて、一年目がスタート。

監督には、太陽ロビンスから石本秀一を呼びました。しかし、この人は、監督とは言いながら、資金集めに翻弄され、四苦八苦。実際の指揮は、助監督の白石勝巳（選手兼任）に任せました。ちなみに石本も白石も、もちろん広島の人です。シーズンが終ってみると、もちろん、セリーグ最下位でしたが、勝率 0.299。しかし、これは立派です。私、知らなかったのですが、この年に、長谷川良平投手がテスト生で入団、名古屋の人。すぐにエースにのし上がりましたね。
翌年も最下位。

しかし、4 年目の 1953 年にはアメリカのマイナーリーグから、銭村兄弟（健三、健四）が入団。特に弟健四の活躍が著しく、やっと、万年最下位の汚名を返上できました。
資金面では、石本秀一懸命の奮闘にもかかわらず、何度も危い局面に立たされました。しかし、広島各市の支援、また、ぜひ広島に球団を存続させたいという県民の熱い想いに支えられて、消滅とか合併の危機は免れました。
画期的なことが起ったのは 1975 年です。アメリカから、ジョールーツを監督に招聘。彼が、チームに新風を吹き込みました。「情熱をむき出しにしろ」というのです。

しかし、阪神との試合中に、ピッチャー投球判定を巡って猛然と抗議。それが元で、1 ヶ月も経たずに退団してしまいます。ただ、皮肉にも、その後を継いだ古葉竹識が、また、私の好きな苦労人タイプの人で、カープを、なんと初優勝に導いたのです。創設以来、苦節 25 年。
日本シリーズでは、私贔屓の阪急に敗れましたが、ご存知の通り、後年日本一に 3 度輝いています。リーグ優勝 9 回。立派なものです。

私は、もともとパリーグファンですから、パリーグのチームは、まあ、どれも好きですが、阪急がなくなってしまいましたので、強いてあげるとすると、柳田悠岐のいる S バンクかなあ、。柳田は広島商業出身。しかし、セリーグとなると、やはり、これほど辛酸を舐めてきた広島ですね、断然。
鉄人衣笠祥雄は、京都平安高校の超スラッガーでした。私の一年下。京都の試合でよく観ましたが、先

年亡くなりましたね、比較的若く、。日米混血。

ちなみに。
上記、銭村兄弟のことを書きました。1953 年、アメリカマイナーリーグから連れてこられた日系 2 世。彼らのお父さん健一郎さんが、広島からアメリカに渡られた人でしたから、これは広島という球団の特殊性かなと思いましたが、そんなことはありません。その頃、同様の経路で、日本に来られた日系二世のプロ野球選手って、多かったのですよ。その時は、大リーグから引っ張ってくるなんて、日本の野球レベルがまだ低かったし、それにまず経済的に不可能。また、日本語が片言でも、日系人だと違和感がなかったのでしょうね。
私の知っている、日系 2 世のプロ野球選手をあげてみます。大抵は、ハワイから。ハワイ、その頃はまだ「州」ではありませんでした。

ウオーリー要　与那嶺（外野手）; 巨人
アンデイ敏雄　宮本（外野手）: 巨人
柏枝文治（内野手）: 巨人
広田　順（捕手）: 巨人
若林忠志（投手）: 阪神、毎日
与儀真助（内野手）: 阪神、大映
ビル西田（投手）: 巨人、東映、大毎、国鉄
スタンレー橋本（内野手）: 東映、大洋
カールトン半田（内野手）: 南海、中日

この中で、最も印象に残っているのは、カールトン半田。TV で、よく知っていました。半田は、南海の貴重な Utility Player（内野の何でも屋さん）、でも主に二塁手です。この人はいい選手でしたよ。噛みタバコをいつも口に服み、頬っぺたを膨らませていましたね。この人です、優勝後のビールかけを日本に持ってきたのは、。ああ、もったいない、。ご存命で、ハワイに住んでおられます。92 歳。

それと、東映時代のビル西田。実にいいピッチャーでした。

惚れる

ある人が、ちょっと面白い質問をしてきた。
「あのう、ちょっとお訊きしてもいいですか？」
「、、ええっ、??、、、は、はい、、」
「XX さん、あなた、ご自分を客観的に見ることができるとして、ご自分に“惚れる”かもしれないということがあると思われますか」

あまりに唐突な、また意表をつく質問であったため、私、この時、迂闊にも、「うん、」と答えてしまった。
しかし、ここは、「わからない」というのが妥当であるとは、すぐに気がついた。その後、その質問主に訂正した。

だって、現実的に、自分を第三者の目で眺めることなど不可能なのである。
だから、もし、私のクローン（生き写し）が、私の目の前に忽然と現れたとしても、私がどう反応するかはわからない。「生き写しだから、好き」だというのは、ちょっと解せない。また、逆に「、、、だから、嫌い」とも言えない。要するに、「わからない」。

そして、今ある自分を、第一人者としてみる場合であるが、これは、我々が「自分」というものを考えるときの一般的なやり方、「自分とは何か」。その「自分」をどう思うか、ということなら、少しはわかる気がするが、それにもわからないところがある。ところで、ある人が、誰かに初見で「惚れる」というのは、実に特殊な感情で、一生のうちに、一度あるかないか、。

因みに、「惚れる」と言う感情の動きは、努力してもできるものではない。どう言うわけか、自然に、そう言うことが起る。ある時、ある人から「惚れてください」と言われて、笑ってしまった。私の場合はそういうことが、一度だけであるが、あった。
人が、誰かに初めて会うとき、普通は「こんな人だったらいいな」という「理想像」を描いて臨むものだと思う。少なくとも、私の場合はそうである。そして、目の前に現れた人が、その理想像に完全に合致したとき、ある現象が起る。「一目ぼれ」である。
私の場合は、そんな塩梅であったが、この稀有な経験は、私の大事な宝物。今も大事にしている。

ただ、私が惚れたのは、あくまで、「第三者」に対してである。
というわけで、私、人が「自分自身に惚れる」というのは不可能であると思う。存在しない感情。
当然のこと、人間、いろんな困難を克服して研鑽を積み、また業績を上げ、然るのち、「自分に自信ができた」ということなら、よく分る。そして、そういう人は、まあ魅力的である。
しかし、そういう人でも、自分の足りないとか、弱いところとかは勿論知っているのであるが、そういうこと、普通、第三者にはわからない。
また、いくら仕事もでき、業績も十分上げられて、立派に見える人でも、それを鼻にかけるような人だと、それこそ「鼻持ちならない」。自分のことを”肯定的に”捉えるのはいいけれど、「私、自分が好き」と言う人がおられたら、嫌われるのは目に見えている。

映画俳優とかの有名人は、遠くにいて眺めていればこそいいのだと、私は思う。惚れてもいいけれど、「夢の世界」のことだと弁えておいてくださいね。

私の英国植物史

須永静江

1.　　つくし：　学術名はさて置き、漢字では「土筆」と書き、英語名は ‘horsetail’「 馬のしっぽ」である。どちらも、形状からくる連想で親しみやすい。

つくしは私にとって、子供の頃、川原の土手で良く見かけた懐かしい植物の一つであるが、最近ふと記憶をたどると、イギリスのどこかでも見たことがあるような気がする。実際、この夏、Surrey でスギナ（ 杉菜 ）を見かけたので、来春にでもその地に出掛けて行けば、つくしが見えることになる。なぜなら、つくしもスギナも、地下を這っている同じ根茎（rhizomes）から芽を出しているからである。つくしは、胞子を作って子孫を撒き散らす働きをし､スギナは根から吸い上げる水と太陽光､そして、大気中の CO2 を使って光合成をし、大気中に酸素を放散し、栄養分を作って成長や生命持続に役立てる働きをする。

つくしは、現在、ユーラシアや北アメリカの温帯地帯の土着の多年草である。その祖先をたどると、古くはデボン紀後期（ 約 3 億 7500 万年前）の化石がノルウェイのスピッツベルゲンやアラスカから出ている。この頃のノルウェイやアラスカは、赤道近くに位置し熱帯的な気候であったと思われる。

生命は海から陸へと進化して行く。植物も水中から陸地へと生存場所を広げて行く。水中の藻（　　も ）が、湿気のある地に生存できる苔に（ こけ ）進化し、やがて、栄養分を貯める根（roots）を持つ vascular plant（ 光合成をし、栄養分を体全体にめぐらす、人間の血管に似た組織を持つ植物 ）へと進化して行く。羊歯類や horsetail は、地球最初の vascular plants で、子孫は共に胞子（ spores ）や根茎（ rhizomes ）で増やされる。次に進化して出て来るのが、種（seeds）で子孫を増やす植物である。

さて、デボン紀に続き石炭紀も、地球の造山活動は活発で、Pangea（ パンジア ）と呼ばれる驚くべき超大陸が出来たのも石炭紀の今から３億 3500 万年前頃のことである。北アメリカ・グリーンランド・北欧全域・イングランドやウェールズのあった Avalonia 孤島大陸などを含む比較的小さな超大陸 Laurussia（ ローラッシャ ）が、それまであった Rheic Ocean（ レイク海 ）が地殻変動で次第に消える過程で、アフリカ・南アメリカ・マダガスカル・インド・オーストラリア・南極大陸などを含む 巨大な大陸の集合した Gondwana（ ゴンドワナ ）と呼ばれる超大陸に衝突して、更に巨大な Supercontinent Pangea が出来た。

石炭紀前期は、地球は暖かく、植物は進化し、多くの新品種が生まれ、熱帯地方の三角州や沼地には、羊歯（ シダ ）、つくし、ソテツ、後になって、銀杏や針葉樹 などの大きな森林が育った。つくしも、

30 メートルも高く、木のように繁茂した。しかし、石炭紀後期には、空気中の二酸化炭素が減り、酸素が 35%にも(現在は 21%) 上昇した。巨大なトンボやゴキブリが繁殖する一方で、気温は下がり、南極や北極に氷河が形成され、氷河時代となる。そして、熱帯雨林は崩壊する。植物は地下に埋れ、地質学的長時間地中で高熱・高圧を受け石炭化する。世界の 90%の石炭が石炭紀の物で、石炭紀の石炭はその 95%が carbon で良質。私達がこれまで燃料として使って来ている石炭のおおもとは、３億年以上前の

つくしや羊歯類の祖先なのである。
さて、つくしとスギナは、前述のように同根茎から生え出る同一植物なので、その繁殖力たるや恐ろしいものである。つくしの放散する胞子で子孫が増えるだけでなく、根茎から芽が出るスギナは、根を切っても切っても、切られたそれぞれの根から更に芽が出るのである。おそらく、かつての我が家の庭の雑草の一つ red sorrel (ソレル) のように、ムカデの脚のようにワサワサと根が生え出るシステムになっているのだろう。ましてや、この根茎は地下 2 メートルの深さにも達すると言うから、“Horsetails are among the world’s worst agricultural weeds.” 「つくしは、世界最悪の雑草の一つである。」と言われるのも納得できる。

つくしは、見て可愛いし、食べると栄養価も高いらしいけれど、「私の庭にも欲しい。」などと衝動に駆られて植えると、たちまち、雑草との闘いとなること必至。ご用心を!

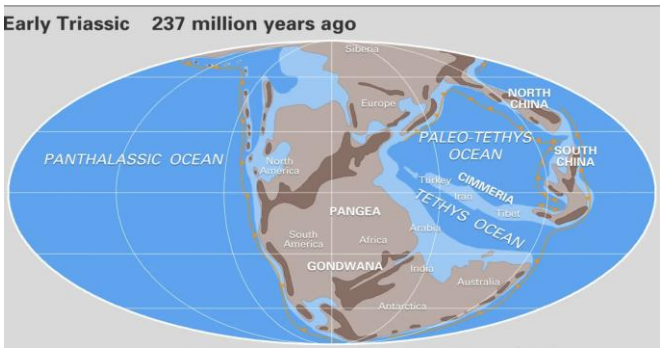
2. monkey puzzle tree： 学術名はさて置き、英語名 モンキー・パズル・ツリー「お猿さんは困った」の木は、まずは名前が面白く、また、ブラーンと垂れ下がって先端がひょいと跳ね上がっている枝の形が、動物のしっぽを思わせて楽しく、一度聴いたら忘れられない名前である。

私は、1975 年夏、UCL (University College London) の言語音声学の試験を終え、東京の兄が送ってくれた Eurail pass (ユーレルパス) を使って、憧れの Lake District (湖水地方) へ旅立った。自分で働いて貯めたお金と、父の経済的支援で私費留学をしていた私。当時、１ポンドは 713 円であった。私は、Youth Hostel の終身会員になり、ユースホステル泊まりを決めた。Windermere のユースホステルには、Cheshire の High School の生徒達が引率教員と共に野外学習に来ていた。夕飯の席で一緒になった Joan は理科の先生で、いとこが日本で働いていたこともあって、私と友だちになった。ロンドンに戻って、秋の初め頃、Joan が私と教員仲間の二人を Cheshire の自宅へ招待してく

れた。近所を散歩の折、彼女がこの木の名前を教えてくれたのである。この木は、日本では見たこともなかったし、珍しい形の木で、珍しい名前であったので、ずっと私の心の中に残っていた。

最近気が付いたのであるが、私が住むロンドン Barnet 地区にも、大きな monkey puzzle tree を前庭に植えている家があちこちにある。この木は育ちが遅く(緻密な材質となる)、成熟するまでに 30 ～ 40 年掛かる上に、成熟して初めて分かる雌雄別の木が、お互いに、風に飛ばされて受粉される範囲に生えていないと実がならない。しかも、その実は、受粉後、雌の木が種 (たね) を実 (みの)らせるまでに、さらに 2～3 年掛かると言う。バーネット地区で見る monkey puzzle tree は、その形からしてまだ若木のようだし､実が付いて花粉を散らしているのは 雄 (male) 木のようだから､その種 (たね) にあやかれそうも無いのは残念である。この木の原生する南米のチリ(の中部、および南部) やアルゼンチン (の西部) では、モンキーパズルの種 (たね) は古くから土着の人たちの主食とされて来ていると言う。種の形は松の実 (pine nuts) に似ていて、大きさはアーモンドの実より大きく、ゆでると、甘栗やとうもろこしの味や香りがして美味しいのだそうだ。この種 (たね) は、実 (みの) ると、まっすぐに 30 メートルも 50 メートルも伸びた高い木の天辺 (てっぺん) から一つずつ地面に落ちて来るのだそうだから、まさに、天からの贈り物である。この木が土地の人達から「聖なる物」と崇められて来ている理由が理解出来る。

monkey puzzle の木の歴史は古く、今から 2 億年以上前 (三畳紀) の化石がマダガスカル島から売りに出されている。多くの動植物が地球環境の変化と共に様々な変種を作って生き延びて来ている中、この木は、ほとんど変化せずに 2 億年以上も生き続けて来ており、living fossils (生きている化石) の一つと言われている。現在、アルゼンチン、ブラジル、ニューカレドニア、ノーフォーク島、オーストラリア、パプア、ニューギニア、チリなどに生存しており、高さ 50m、直径 3m、1000 年以上も生き続けると言われている。



三畳紀 (約 2 億 5000 万年 ～ 2 億年前) には、地球は、 なおも、Pangea (パンジア) と呼ばれる一つの超大陸 (Supercontinent) のままであった。それは、クロワッサンのように曲がった形の巨大な超大陸で、北極から南極に細長くずらっと伸びていた。そして、この超大陸の両脇を超広大な Panthalassa (パンサラッサ) と言う海と Paleo Tethys & Tethys (テーティス) と言う海が囲んでいた。パンサラッサ海の赤道付近の広さは、現在の太平洋の広さの 2 倍の広さだと言うから、その広さには驚くほかない。この時期は、北極にも南極にも氷の山はなく、地球押し並べて温暖で、地質学史上、もっとも暖かい期間の一つと考えられている。大気は、現在よりも、酸素が少なく、二酸化炭素が多く、内陸部は、砂漠化が進み、総じて、暑く乾燥していた。しかし、初め、穏やかだった地殻も、後では、大陸に裂け目が出来、それと共に、大気の湿度が増していった。

続いてジュラ紀 (約 2 億年前) になると、火山活動が活発化し、海底地殻が割れ、大西洋 (Atlantic Ocean) やメキシコ湾 (Gulf of Mexico) などが出来、超大陸パンジアは大きく北と南に分裂し始め

る。山が形成され、海水が上昇し、それまで暑く乾燥していた地域が湿度の高い亜熱帯となる。羊歯、つくし、ソテツ、銀杏、針葉樹（ 杉・松・ヒノキ、など。monkey puzzle も含む ）などが繁茂し、さまざまな herbivores（ 菜食 ） 恐竜が地球上に現れる。菜食恐竜は肉食恐竜に負けないように、草や木の葉をたくさん食べて体をどんどん大きく発達させる。現在（ 2023 年 ）、ロンドンの自然史博物館に「史上最大の恐竜の骨格（ 複製 ）Patagotitan（ パタゴタイタン ）」が展示されているが、この恐竜なども、monkey puzzle tree の枝や葉を食べたと想像される。長い首と長い尾を含め全長 37m、四脚で立った時 の高さ 8m 。この恐竜は、ジュラ紀の後の白亜紀中期（ 今から約 1 億年前 ）にアルゼンチンのパタゴニアに住んでいた。このような巨大な動物が群れを成して地球上を闊歩し、長い首を伸ばして一斉に高い木の葉を食べている様子などは、スケールこそ小さいが、現在のアフリカ象の家族移動の様子から想像出来そうである。1 億年前頃の地球は、すでに、南大西洋が出来、アフリカと南アメリカは分裂。インド、南極、オーストラリアも、アフリカ大陸から分裂。現在の 6 大陸の形がはっきり見て取れるようになる。南極大陸には氷は無く、代わりに大森林が覆っていて、恐竜たちが住んでいた。

3. いちょう（ 銀杏 ）： 学術名は､英語名そのままで､Ginkgo（ ギンコー ）である。

2023 年 7 月 10 日。交通機関のストライキの無い日。雨の降らない、暖かめの夏らしい日。私は、少し前から予定していたこの日に、Surrey の Gomshall と言う所に出掛けることにした。その辺りの村のどこかに､イギリスでは珍しく｢銀杏の木 が見事に黄葉している｣のを見た記憶があるからである。

London の Waterloo の駅から Guildford へ。Guildford で 東へ行く短い電車に乗り換える。電車が動き出すと間も無く、小さな田舎の景色が窓の中に飛び込んで来る。ふと、 “As I walked out, one midsummer morning,” と言う Laurie Lee の言葉（ 本の題名 ）が浮かんで、私の心をウキウキと若返えさせる。３つ目の駅が Gomshall と言う、記憶の中の名前であった。駅を降りてインターネットで調べた通り左に折れ、車道に沿った歩道を歩き出す。念の為、今、家から出て来て赤い車に乗り込んだ女性に、Abinger Hammer（ アビンジャー ハマー ）へ行く道は左進行で良いかどうか確かめた。私は、正しかった。自信を持って、さらに、左へ左へ。

あった、あった！車道の曲がりくねった角に、古い、小さな赤レンガの建物があり、そこの横に時計塔 があって、ハンマーを持った鍛冶屋さんが時間ごとに鐘を突く clock house が目に入って来た。私は、そこまで行って、「間違いなくこの村だった。」と、思った。

この日は、良いお天気だったので、小川のこちら側には、地域の art class の人達らしき高齢者が､ポータブルの椅子に座って静かに絵を描いていた。

多くの人が、Abinger Hammer を描いていた。川の近くでは、川の中に数人、川の外に数人、学校の子供達が先生と何やら覗き込んで、はしゃぎながら勉強していた。「イギリスは、今でも、校外学習や野外学習が盛んなのだなー。」と、感心した。机上で、抽象化された概念を初めから叩き込まれる非人間的な学習ではなく、実生活に基づく具体例からのアプローチが、将来の発明発見に自然と結びついて行くことを信じた教育方針である。私は、小川の向こう側に行って車の通る道の方を振り返った。すると、そこに、由緒ありそうな古いレンガの建物の前に、何年か前に見た、見事に色付いた銀杏の木が立っていた。否 ！ 真夏の今は、緑色だったけれど。

私は、これまで、イギリスには銀杏の木は少ないと思っていた。真っ黄色に色づいた銀杏の木を見たのは、とにかく、この Gomshall で見た物が一つだけであったから。ところが最近、気を付けて見ているせいか、銀杏の木はロンドンの至る所に植っている。UCL の構内にも１本、私の地下鉄最寄駅を出て、少し坂を上がった左手の歩道にも１本。そして、私がよく買い物に行く、Finchley Central の Tesco（ スーパーマーケット）の前には大きな木が５本も並んで植っている。さらに、最近は、North Finchley の Sainsbury’s に行く手前の歩道に若木が数本並んで植えられているし、その向かい側の歩道にも数本。さらに、南に進んで、Tally Ho Corner を挟む両脇の歩道にも若木が数本ずつ植っている。私は、疑問に思った。「ねらいは、何なのだろう？」と。これらの木が秋に黄葉すれば、日本で見られるような「見事な黄金の銀杏並木」が繰り広げられるのだが、それを期待して良いものだろうか？

銀杏の木の歴史は古く、早くはペルム紀の今から約２億 7000 万年前に現れている。イギリスでは、Yorkshire Coast の１億 7000 万年前（ジュラ紀中期 ）の氾濫原の砂岩から葉の化石が発掘されている。銀杏は、前述の、monkey puzzle tree と同じように seeds（ 種 たね）で増える植物で、菜食恐竜の食料であった。

話は前後するが、銀杏は、都市環境によく適応すると言う。大気汚染や狭い土地環境に耐え、病気や害虫の被害もほとんど無いと言う。この点を考えると、最近、ロンドンの歩道に、銀杏の若木が多く植えられている理由が分かる気がする。もちろん、多様性（ diversity ）を重視する英国のことであるから、銀杏が都市環境に向いていると言っても、市内の歩道に銀杏の木ばかりを無数に植えることはしない。

銀杏にまつわる話には限りがない。広島には、「被爆樹 ヒバクジュ」と記された木が６本あるらしい。爆心地から １ ~ ２ km 内に生えていた銀杏の木が６本、いったん焼け焦げはしたものの、間もなく元気を取り戻し、現在もなお生き続けていると言う。また、銀杏は、東京都の木であり、緑の葉はシンボルマークだとか。東京大学の學章は、銀杏の葉２枚を形どったものだとか。何故、銀杏を選んだのであろうか、その理由が知りたいものである。

終わりに ： 植物こそ、空気中の二酸化炭素を減らしてくれる大切な存在である。ましてや、そうすることで、私たちのエネルギー源である食物を作って供給してくれる。何と有難いことか。植物を育てよう。植物を大切にしよう。

言語化できますか？

伊東敬行

在英 8 年、齢 50、海外に居住しているからなのか、世の中の流行についていけない歳になったからなのか、「言語化する」という言葉を最近よく聞くようになった気がするものの、それをいつから聞くようになったのか、誰が言っていたのか、よくわからないもやもやを感じています。「言語化する」というのは、一時的な流行り言葉なのか、今後も残り続けるフレーズなのか、僕にはわかりませんが、聞きなれない言葉や「新語」を耳にする機会が増えたことは、海外生活が長くなるにつれ、日本語に触れる機会が減っていることと関係しているのは、間違いないでしょう。いや、もっと言えば、海外生活だからということではなく、正確には「世の中と繋がっている度合いが減っているから」と言ってもいいかもしれないです。

みなさん、東京スカイツリーは知っていますか？今調べてみると、2012 年 2 月竣工とあるので、2011 年の出来事だったんだと思います。とある週末、元同僚たちと僕の 4 人で、それぞれ新しい会社へと転職したお互いの近況を報告するために、久しぶりに集まりました。飲食店に向かう道中で、たまたま東京スカイツリーの話になりました。話題についていけなかった僕は、「東京スカイツリーって何？」と聞くと、4 人のうちの 1 人が、テレビドラマのワンシーンのように、ピタッと歩くのを止め、僕を含む他の 3 人が歩いていくのと、どんどん距離が離れていきました。僕は、後ろを振り返り何があったのかと聞くと、「東京スカイツリーを知らないの？？」と絶句していました。当時、僕は転職した先の会社を退職することを決めていたため、仕事に関係することを含めて、ニュースはチェックしなくなりました。それどころか、引っ越しをすることもわかっていたので、テレビなど家電製品も徐々に処分しながら、ユーチューブなどインターネットの英語番組以外は、ほぼ見ない生活をしていました。世の中との繋がりが薄れていったのは、この頃からかもしれません。

これも古い話ですが、「食べるラー油」はご存知ですか？コンビニで、ラー油関連の商品を目にするようになった当時、別な友人グループと話している際に「最近ラー油が流行っているんだよね？」と聞くと、1 人の友人から「よく気がついたねー、すごいねー」と少し小馬鹿にされて、「世の中のことに疎い人」という扱いを受けていることに気づかされました。母親にも、「テレビを見なさい！」と言われるようになったのも、この頃の出来事です。普通は「テレビを見すぎるな」ですよね！？

最近気になる言葉は、「知らんけど」「親ガチャ」「斜め上を行く〇〇」「オワコン」などです。「知らんけど」と「斜め上を行く〇〇」は面白いフレーズだなーと、個人的には思っています。「あの人、めちゃめちゃいい人やなー。知らんけど。」「同僚 A がとった行動は、斜め上を行くものでした。」などなど。言葉って面白いなー、とつくづく思います。そんなことを考えていると、いつも辿り着くのは、英語のことです。

最近、仕事のことを考えて、英国で資格の勉強を始めました。勉強を始めてすぐにぶち当たった壁が、30 分で集中力が途切れることでした。休憩を挟みながら半日も勉強すると、もうそれ以上、脳が働かないことを感じます。眠気が襲って来て、脳が容量オーバーのシグナルを出します。そういう時は、止むなく短時間の睡眠をとって、頭をリフレッシュします。そうした「現実」に直面することもあり、勉強を始めてからというもの、学習関係のユーチューブ動画で「勉強の仕方」を「勉強」をするようになりました。トホホ。。過去の自分の学生時代と比較するため、また、言語の理解力の問題から、日本語のユーチューブ動画です。そこで、時々耳にするようになったのが、「地頭（じあたま）がいい人と、そうでない人の違い」というフレーズです。理解や飲み込みが早い人のことを、「地頭がいい人」というようで

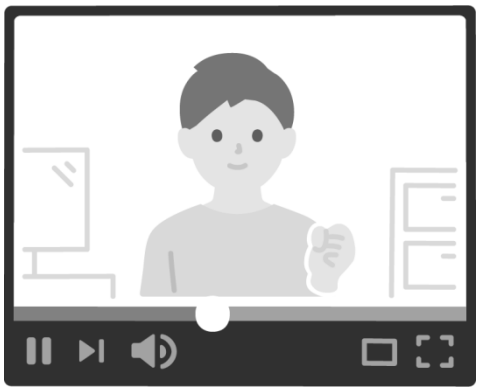
す。学生時代の成績は、目立って良くはなかったですが、田舎のレベルでは「まずまず」という感じでした。ところが。。。

英語のテキストを使って、練習問題を解きます。問題文が頭に入ってきません。。読んだはずなのに、設問を解こうとすると、問題文に何が書いてあったのか、思い出せません。問題文と設問を何度も行ったり、来たりを繰り返しながら、ようやく回答することができます。しかし、自分の回答を正解とチェックすると。。。自分でもびっくりするほど、単純な間違いや、見落とし、思い違いなどをしています。日本語なら、こんな間違いはしないのに。。（実は、するのかもしれません！）

昨年 2022 年 3 月にコロナに感染しました。幸い病院に行く必要もなく、当時在宅勤務だった仕事を休むことなく、一週間ほどで完治しました。これほど単純なミスをするという体たらくは、きっと、コロナの後遺症だ、僕はそう睨んでいます。ブレインフォグと呼ばれる症状かもしれません。はたまた、100 歩譲って、50 歳という年齢が関係しているのかもしれません。それは、認めたくないものの、抗えない事実なのかもしれません。いや、、まさか、、、もしかして。。地頭の問題なんでしょうか？？！！

テストができるかできないか、地頭がいいか悪いか、これらの意味するところは何なんだろう、そう考えるようになりました。そして、思いました。記憶力です！僕たち人間の「能力」の源は記憶力だという「結論」に、僕の中で辿り着きました。言葉を操ることができるのも、それを記憶しているからなんだと思います。もっと言えば、人間の感情、楽しい、悲しい、恨み、称賛、などなど、全て過去の記憶から発生している心の動きだと思います。

最近見たユーチューバー（ユーチューブ動画を作成する人）が言っていました。東京大学理科三類を卒業したエリート医師です。(人柄は気さくな人です。知らんけど。)「人間は 4 次元の世界を生きている」と。え？3 次元じゃないのかな、と思いましたが、時間の概念を加えて 4 次元だそうです。なるほど、話を聞いて合点がいきました。ただ、その人は、人間と動物の違いは、言語能力と論理的思考力、と言っていましたが、僕はそれ以前に、「記憶力」に決定的な違いがあるのではないかと思っています。



唐突ですが、みなさんは、未来が見えますか？冗談ではなく、本当の質問です。見える「未来」が、遠い将来か短い将来かは、分野や個人差はあるにしろ、人間には未来が見えます。時間の概念があるからです。今何かをすると（または、しないと）、その結果として何が起こるのかということを考えて、人間は行動を決定します。それは、多くの場合はこういう結果になるといった「蓋然性」かもしれませんが、特定の出来事については、より高い「確実性」が「見える」人や状況も出てきます。東京大学理科三類卒業の別なユーチューバーが言っていました。「入試で自分が解けない問題は、他の受験生も解けないことは分かっていた」と。また、元プロ野球選手が、言っていました。「自分が調子がいい時に、この球をこのコースに投げたら、誰も打てないことは分かっていた」と。

最近の流行り言葉で、「無双する」というのを、聞いたことはありますか？スポーツなどの世界で、誰も止められないような、飛び抜けた活躍をする選手のプレーを「無双する」と言います。そのような選手は、「未来が見えている」と僕は思います。その人が「見える（想い描くことができる）」通りの「未来」が現実となって現れるはずです。考えてみると、社会そのものが、未来を見極めようとする活動なんだと、僕は思います。明日の天気は晴れるのか、雨なのか、今年の米は豊作なのか、不作なのか、インフレーションは今後上昇するのか、下落するのか、為替レートは上がるのか、下がるのか、不動産は今は買い時なのか、そうではないのか。過去の記憶（歴史・経験則）から将来を推測して、それに基づいて行動する、それが世の中の活動なんだと思います。

動物も、未来は見えると思いますが、ごく近い未来だと思います。ユーチューブの動画で、ペットの面白い行動を集めたものが沢山出て来ます。ペットも、人間の言葉や行動を理解していると感じます。ただ、明日や明後日、ましてや5年、10年先の将来のことまで「見ている」かというと、そうではないと思います。何より、言葉を話さず、文字を持たないため、現在や過去の「記憶」を他者や子孫に伝えることができません。いい意味では、負の感情や記憶を、将来に残さないと言えるかもしれません。動物は根本的には天真爛漫だと思います。可愛い小動物も、猛獣も、生きるために必要な範囲で他の動物や植物を食べますが、「未来」まで見て行動しません。または、リスのように木の実を隠して将来にとっておいても、どこに隠したのか忘れてしまうので、未来が見えているとは言えないと思います。

人間には「未来が見える」能力があると思いますが、これは、「人間社会」の出来事についてです。自然現象について、「未来が見える」人は、本物の超能力者だと思います。自然現象については、せいぜい、一週間先の天気予報ぐらいまでではないでしょうか。動物は、明日生きているか、死んでいるか、予測もついていないと思います。「明日」という時間の概念もないと思います。人間には、「未来」が見えます。可能な限り「確実性」を高めようとします。今日食べられるだけのものを収穫してよしとはしません。明日食べるものを、今日確保しようとします。もっと言えば、一生分の「利益」を今すぐにでも稼ぎ出して、早期リタイアすることまで考えます。今日生きるか死ぬかを考えなければならない状況は、「先進国」ではほとんどありません。スーパーマーケットに行けば、「食材」が選び放題であることは、誰もが知っています。でも、考えてみれば、スーパーマーケットに並ぶ「食材」の大多数は、人間によって何日も、いや、何年も前に食材として並ぶ「未来」が決められ、飼育・栽培されていたのではないかと思います。その意味で、人間には未来が見えます。少なくとも、未来を予測して行動します。他の動物が追随することができない「文明社会」を築き上げたのも、過去と現在の記憶を元に、未来を見通す能力があったからこそだと思います。それは、素晴らしいことではありますが、未来の「確実性」を高めたがゆえに起こる、問題が沢山発生していると思います。人口爆発、地球温暖化、大気汚染、過度な競争、社会の閉塞感、などなど。他の動物の「視点」から見たら、人間は計算高く、貪欲かつ獰猛で、恐ろしい動物に見えるのではないか、そう思うこともあります。人間に睨まれたら、どんな動物も太刀打ちできないでしょう。。

そんなこと、あんなことを、あれこれ考えながら、「この考えを英語で言語化できる日は、来るのだろうか。。」と、最近は思い悩んでいます。英語のテキストブックに集中できなくなった時、現実逃避をしながら、あーでもない、こーでもない、と考えて「なぜ英語ができるようにならないのか」という根っこの周りをぐるぐる回り続ける日々と格闘中です。英語の読み間違いや、ケアレスミスをする度に、本当に自分はアホだな、と思いながら、学校の先生に言われたことと正反対のことをして、怒られる小学生のような気分になります。言葉が正しく頭に入ってこない、と感じます。地頭が悪いのだろうか。。地頭ってなんだろう。。？

記憶＝言葉が頭に残っていること、それが現時点での僕なりの「結論」です。言語化できる＝記憶にその言葉がある、言語化できない＝記憶にその言葉がない（またはすぐに出てこない）、ということだと思います。また、簡単なことを間違えてしまう＝言葉が記憶に残っていない、そのため、「みんなができること」を間違えてしまう、それがメカニズムなのではないかというのが、僕の最近の「自分研究」から導き出した「研究成果」です。（コロナの後遺症や年齢が原因だとしたら、また別な話ですが！）

そんな結論を導き出したところで、現実は何も変わりません。。この先、英語がどこまでできるようになるのか、ならないのか、わかりませんが、英語で「言語化できる」未来を夢見て、日本語も大切にしていきたい、そう思う今日この頃です。この文章が、日本語として「言語化できている」ことを願いながら。

陽光に輝く街、サラエボ

ビドル　惠

朝食にコーヒーを頼んだら、エスプレッソのような小さいカップで出された。『？』と思いつつ砂糖を入れてかき混ぜようとしたら、スプーンが立つほど底に“澱”があってビックリした。未だしっかりと目覚めていない頭の中で「もしかしたらこれは、トルコ式に煎れた珈琲ではないか？」と気がついた。こうなったら、かき回してしまった珈琲豆の粉が再び底に沈澱するまで、ひたすら待つしか無い。普通（？）のコーヒーをサッと飲みたい時は、“アメリカン”と言わなければならない事を後で教えて貰った。

此処はボズニア・ヘルツェゴヴィナの首都サラエボ。アドリア海とハンガリーを結ぶ交通の要地として、15 世紀後半にオスマン帝国の支配下で繁栄した商業都市だ。ディナール山脈に囲まれた、丘陵地帯に出来上がった為に急勾配の坂道が多く、市街地の真ん中を東西にミリャツカ川が流れている。当時のイスラム風の街並みを保存した旧市街地と、19 世紀のオーストリア・ハンガリー帝国時代の大きな建物が並ぶ中心地、そこから政府行政機関やホテルなどの近代的高層ビル街や、共産主義時代の名残りでもある集合住宅区が西に伸び、四方の丘の斜面に閑静な住宅地の広がっているのが特徴だ。

街は又、宗教的な多様性でも知られており、イスラム教、ユダヤ教、セルビア正教、ローマ・カソリック教などが何世紀にもわたって共存して来た。東欧特有の中世の街並にモスクやバザール（市場）、広場などが隣接するという、多民族都市らしい独特の雰囲気を持っているのがサラエボの魅力だが、反面それは紛争の火種にもなって来た。繁華街からちょっと外れると、銃弾の痕がいっぱい残った建物が並んでいたり、ひときわ高い丘には、砲弾で破壊された冬季オリンピック（1984 年）の競技場や施設が、ただ朽ちて行くままに放置されているのは、かつて此処に起こった紛争の記憶を風化させない様に～という意図からだろうか？

1992 年にユーゴスラビアからの独立を巡って勃発した“ボズニア・ヘルツェゴヴィナ紛争”は、ボシュニャク人（ムスリム）とクロアチア人（カソリック）、そしてセルビア人（正教）の三民族が、各々の勢力圏拡大を目的としていた為に深刻化し、政府の行政議会ビルが所在するサラエボは、ボズニア系セルビア人勢力に丘の上から完全包囲されて銃砲撃を受け、住民は買い物も通学も“命懸け”という状態に陥ったのである。

1996 年にやっと NATO の介入で、其々が独立性を持つ国家体制を形成する事で合意/終結に至ったが、死者 20 万人、負傷者 100 万人、国内での難民 130 万人、国外への難民は 125 万人に達して、第二次世界大戦後のヨーロッパで最悪の紛争となった。終結後は 6 万の“ボスニア和平実施部隊”が導入されて、新しい国家『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦』の復興が始まり、何千人もの死者を出したサラエボでは、破壊された建物の残骸処理と修復が急ピッチで進められて、2003 年の時点で殆どの部分は復興、再開発に至っている。

私がサラエボを訪れたのは、オーストリア大使館・兼勤駐在官事務所が、在ボズニア・ヘルツェゴヴィナ日本国大使館に格上げされた年だから、2008 年の事だ。同国の復興を文化、教育、交通などの面で支援していた日本国政府/日本国大使館が催す『日本の文化紹介』の講師として招かれた為である（若輩

者の私が選ばれたのは英語で説明/指導できるからで、ボズニア語に通訳する方がもう一人り居れば済んだ由)。

当時、英国からボズニアへの直行便は未だ無く、クロアチアのザグレブ空港で「飛ぶのかよ～？」と心配する程古いプロペラ機(DHC－8 型)に乗り換え、ヒヤヒヤしながらサラエボへ向かった事を記憶している。着陸体制に入った飛行機の窓から、紛争犠牲者の埋葬地が丘の斜面に何箇所も見られ、ニュースで知らされていたとは言え、白い墓石の数の夥しさに驚いたし、無事に辿り着いたサラエボ空港に民間航空機の姿は無く、代わりに UN マークの着いた迷彩色の輸送機が沢山並んでいて、浮かれ気分は吹き飛んでしまった。

空港から宿泊先のホテルまでは大使館の方がお世話して下さったのだが、翌日からの打ち合わせが済むと直ちに「では明日の朝８時に、お迎えにあがります」とホテルに置き去りにされた瞬間は、預けた荷物がザグレブでの乗り換え時に紛失していた事もあって、映画 “Lost in transition”の心境/場面そのものだった。ホテルのレストランでは英語が何とか通じたので、晩御飯(ラム肉の煮込みとライス)にはありつけたし、荷物もその夜の内に届きましたけどね。

さて、朝のコーヒーで驚かされた初日は、美術アカデミーで大学生を対象にしたワークショップ(教室)だった。学生達は紛争の記憶を持っているせいか？無口で、おとなし過ぎるのでは～と感じる程だったけれど、眼差しは真剣、色んな情報を吸収したい！という意気込みは伝わって来た。ヘッドスカーフを巻いたボシュニャク人女学生の姿も混じって居たので、民族の和解が進んでいる事を実感できた。

翌日は高等学校を訪問。大学生より年齢が下がる分、紛争の記憶は無いに等しく、笑い声が聞かれて楽しかった。手順が分からなくなって戸惑う生徒にサッと近寄り、手助け/個人指導するのだけれど、その度に「忍者！」という掛け声が男子生徒達から上がり、日本という国は詳しく知らなくとも、アニメやテレビゲームは普及しているのだなぁ～と感心した。因みに「“忍者”以外に知っている日本の言葉は？」と聞いたら、トヨタやソニーなどの会社名が帰ってきた。

お昼は、トルコ風のカフェやレストランの並ぶ旧市街地で、聞こえて来るアラブ風の音楽や地元のヒット曲を楽しみながら優雅に頂いた。お勧めの“牛肉ステーキ”にはヨーグルトソースがたっぷりとかかっていて、それが少々重いなぁ～とは感じたけれど、美味しかったので見事に完食。ところが、お店を出て 5 分も経たない内にお腹がシクシクと痛み出し、10 分後には物凄い腹痛にみまわれた。尾籠な話で誠に申し訳ないが、生のヨーグルトに祟られたのか？お昼休みの間中、脂汗を浮かべての雪隠詰め(古い)！という悲惨な状態に陥ってしまったのである。

この話には続きがあって、訪問先の高等学校のトイレ(生徒用)は水洗でも、旧式の“しゃがみスタイル”だったので、大使館に勤める通訳/お世話係のヘレナさんは大変恐縮していた。「日本も昔はそうでした、慣れてますから大丈夫ですよ」と余裕で個室に入ったものの、日本のスリッパ型便器と違って甲の部分(狙いを定める方向)も足乗せも無く、

ただ傾斜のついた床に丸い穴が空いているだけだったので、何方を向いて使用すべきか？ちょっと悩んだ。昼食後の緊急事態に、この旧式トイレでは絶対に無理、教員/訪問者用の洋式トイレ(数が少ない上に施錠されている)の拝借をお願いした。

最終日は初等学校の生徒達を大使館に招き、地元 TV 局の収録と同時進行で、簡単に折ったものを使ってのお話しタイム。小さい子供達にキラキラと輝く目で見詰められて、元気をいっぱい貰えた一日だった。お別れの時に出口で、大使館の方が大っきなボウルに入れたキャンディを勧めると、行儀良く一列に並んだ子供達は少しハニカミながらそっと手を入れて、一個づつ上から順にツマんで行くのであった。これが英国の子供なら、欲しい物/味をかき混ぜて探したり、男の子ならガバッ！と掴めるだけ掴んで行くのではないか？などと思ってしまった。紛争を知らない純真で無垢な子供達を見ると、ボズニア・ヘルツェゴヴィナの明るい未来と平和を祈らずにはいられなかった。

滞在した三日間はスケジュールがビッシリと詰まっていて、観光の余裕は全く無かったけれど、僅かな時間を見つける度にヘレナさんは、息抜きを兼ねて外に連れ出して下さった。ミリャツカ川に架かる石造りのラテン橋(1914年に、オーストリアの帝位継承者フランツ・フェルディナント夫妻が暗殺されて、第一次世界大戦を引き起こすキッカケとなった“サラエボ事件”の場所)や、美術アカデミーの生徒がデザインしたというスチール製のカムリヤ橋を渡ったり、銃弾の跡が薔薇色に塗られた目貫通りで、一緒にアメリカン・コーヒーを飲んだりした。訪問先への移動の際に車窓から眺めるだけだったが、再建された国立劇場や運行を再開した路面電車、修復途中の国立図書館なども、丁寧に説明して頂いて嬉しかった。

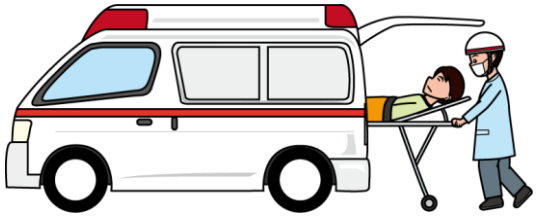
ホテルは閑静な丘の中腹に在ったので、眺めもさぞかし～と期待したのだが、残念ながら私の部屋の窓からは一段高い隣家の裏庭しか見えなかった。代わりに、其処に飼われていたハスキー犬と朝の挨拶を交わしたり、早朝に散歩に出るのも気持ち良かった。朝の陽光に照らされたサラエボの市街地を見渡すと、向かい側の丘に立ち並ぶ住宅地の赤い屋根瓦の綺麗なこと、其れを取り巻く濃厚な森林の翠とが色比べをしているようで、息を呑む程に美しかった。そして何と言っても強く印象に残ったのは、物価の低い事だった。ホテルやレストランでさえ伝票を２回見する程に安かったし、野菜不足を補おうと小さなお店で林檎や蜜柑を買ったところ、一個が４ペンス(約 6.96 円)にも満たなかったので驚いた。

あれから 15 年、現在のサラエボは紛争の傷跡が急速に消えて復興も進み、経済も紛争前の水準に回復しつつあるとか。“Google map”で見ても、かなり開発が進んで広がっているのが分かるし、旅行ガイドブック“Lonely Planet”の訪れてみたい『世界の都市』ランキングでは、43 位に付いている。古いプロペラ機は(帰りは生憎の悪天候で大揺れし、命の縮む思いをした)、ジェット旅客機の直行便に代わり、多くの観光客が訪れて賑わっているそうだが、果たして物価は昔のままだろうか？それとも、他のヨーロッパ諸国並みに上がってしまったろうか？是非もう一度訪れてみたい～と願っている。

NHS 二泊三日

一静齋

突然、右手と右前腕（ forearm ）が冷く麻痺して行くのが分かった。「どうしたのだろう？怪我でもしたのだろうか？怪我をするような動きはしていないのに！」



2023 年 4 月 9 日。イギリスでは、Easter Sunday で、四連休の三日目であった。私は、三年半振りに日本へ帰国して三週間を過ごし、ロンドンに戻って五日目の朝だったので、ロンドンでの生活のリズムを取り戻すべく、５時起きをして Pilates（ ピラティス ）をしているところであった。
私は 30 分くらい、お茶を作ったり、居間と台所をうろうろしながら様子を見ていたが、一向によくなる様子は無い。冷くなって行く手と腕を、体の他の温かい部分に当てると、温かさが伝わって冷たい麻痺もやわらぐようで、何故か、生き返って行く感じ！がしていと（ 愛 ）おしかった。しかし、それはいっとき(一時)で、その温かい接触から手を離すと、手も腕も矢張り冷く麻痺している状態に変わりは無かった。

寝室に行ってベットに横たわり、30 分ほど様子を見ながら考えた。「どうすれば良いのだろう？」
結局、意を決して、枕元の上に天井から下がっているオレンジ色のプル・コード（ pull cord ）と呼ばれる細紐を引っ張った。(retirement flat には、いくつかの部屋に、緊急用の呼び出し紐が設備されている。)

例によって、「どうしましたー？」と、少し間延びした女性の声が聞こえて来た。「実は、Pilates を練習していたら、突然、右前腕と手が冷く、麻痺して来て、、。指も冷く麻痺してしまって、、。救急車を呼ぶほど悪くはないので、一番近くにある救急（ A&E ）病院を教えて下さい。」と、私は言った。「111 に電話をしましたかー？地域病院の様子は 111 が一番良く知っていますよ。」と、言うことで、111 に電話をすることになった。

111 に電話をし、上と同じ状況を説明をした。「分かりました。それでは、こちらから電話をかけます（ “call back” します ）。その間、状況が悪化するようでしたら、また、111 に電話を下さい。」
１時間近く待ったが、電話は来なかった。私は、再度、111 に電話をし、指が少し紫がっかって来た、と告げた。(実際、指が変色した？などについての自信は無かったのだけれど、指の冷たさは嵩じて、電話のキーをタップする事も出来ないほどになっていた。)

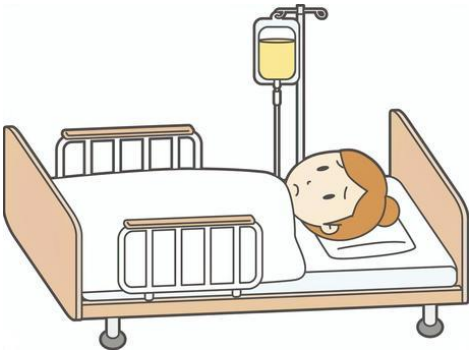
次に、ふと、携帯電話を見たら、病院からの電話らしい赤数字の番号があったのでそれ（ voicemail ）を左指でタップしたら、「こちらは、救急車です。今すぐ、出掛ける用意が出来ています。」「今すぐですか？」「はい、今すぐに。」と言うことであった。私は、何故か、慌てて、「朝ご飯を食べなければ！」と思い、少し腹ごしらえをした。まもなく、二人の救急隊員（ パラメディックス ）が来て左手の血圧や脈拍を測り、冷く痺れた右前腕・手・指などを見て、「どこの病院が良いか、」などと、軽く世間（ せけん ）話をするように話し合っていた。女性の救急隊員が、“ We‘ll look after you. ” と、自信と誇りを持って言って、私を安心させた。

「さあ、病院に行きましょう。支度をして下さい。」と言うことで、私は、大慌てで支度をし、救急車に乗せられて救急病院へ。出かける間際に、一緒に乗った男性の救急隊員が、「何か質問はありますか？」と言ったので、「どこの病院へ行くのですか？」と、聞いた。病院名を聞いて、私は、安心した。家からさほど遠くない所で、私は、その病院を知っていたからである。

時折、ピーポーピーポー、と、特別な音を鳴らしながら、女性の救急隊員が車を走らせた。Easter Sunday の朝のせいか、道路は静かであった。私は、椅子に座っていたので、時折、救急車の窓の外に、見慣れ

た商店名などが通り過ぎて行くのが見えた。昔、東京の義理の母が、彼女の娘がお産の時、「救急車で病院に行ったのよー！」と、とても自慢そうに話していた時の様子が頭をよぎった。
車は、滑らかに進行し、全てが「確かさ」を持って、目的の病院へ到着した。私は、すっかり、安心していた。
A&E 部門に着くと、私は、用意されていたベッドに横になって休んだ。二人の救急隊員は、病院の医療部隊に私と私の情報を手渡すと、“Best wishes.” と言って、私と視線を合わせてから去って行った。彼らの、 親しみのこもった礼儀正しさはとても自然で、病名や病院の判断も的確と言う印象に、私は、“We’ll look after you.” の言葉の意味を確と噛み締めた。

私が、上半身だけ裸になり病院服に着替えてベッドに横になると、すぐに、左腕が検査記録計のような機械に結び付けられ、血圧、体温、脈拍などの検査が頻繁に行われた。やがて、「CT スキャンを撮りに行きます。」と言われ、一部屋、向こう側にあるお部屋にベッドごと運ばれて行った。「CT スキャンをやったことがありますか？体に、あったかく感じる液体を注射して、撮影します。」「はい、やったことがあります。」運ばれて来たベッドから撮影台に移されて、視線を上に走らせると、Prime Aquiline Toshiba と言う文字が見えて、私を元気付けてくれた。「この医療機器は、日本の東芝の製品なのだ！」(私は日本経済が上り始め頃の 1974 年からイギリスに住んでいるので、最近の日本の産業が、以前のように画期的な世界ニュースにならないのを心配していたからである。)



CT スキャンが終わると、運ばれて来たベッドに再び移され、待合室に戻って、スキャンの結果を待った。ここの待合場所は、カーテンで幾つにも仕切られ、いつでも個室的になるのであった。カーテンは、しょっちゅう、閉められたり、開けられたり。細い通路の向こう側に、大声で、息苦しそうに唸っている年配の男性がいた。彼の、赤と白の横縞模様のソックスが見えた。看護婦さんやお医者さんなどとの会話から、この人は、お酒飲みで、重要な手術が緊急に必要なようであった。息子さんが電話で呼び出され、間も無く、この男性の元に来ると、男性は手術室に運ばれて行ったのであろう。辺りはすっかり静かになった。

私は、尿意をもよおし、通りがかりの看護婦さんに、「おしっこがしたい旨を伝えた」すぐに、真ん中に穴のある、簡素なコモードと言う椅子が運ばれ、カーテンが閉められ、簡単にことが済んだ。考えてみれば、朝からずっと横になったままで、おしっこはこれが初めてなのである。
やがて、若い、女医さんがカーテンを開けて現れ、‘Vascular (血管の) Doctor.’ と自己紹介した。彼女は、私の右腕を開いて見て、「ここ (尺骨動脈) に、血液が溜まっているのが分かります。」と、言う。(確かに、その部分が外から見ても黒くなったいた。) 彼女は、もちろん、CT スキャンの結果をしっかりと調べて言っているのである。「対処の方法は、三つあります。一つは、血液を薄める薬を投与するだけ。もう一つは、詰まった血管を切り開いて凝結した血液 (blood clot) を取り除き、この blood clot が体の他の部分に運ばれていかないようにしてから、血液を薄める薬を投与する。三つ目は？私は、二番目の方法が良いように思えたので、三番目の選択肢をしっかり聞いていなかったようだ。二つ目の方法の場合は、局部麻酔 (local anaesthetic) で血管を切り開き、血栓を取り除いた後、small bypass operation をして血液の流れを良くする、と言う。そして、勿論、血液を薄める薬も投与する、との事。私は、二つ目の選択肢が、モダン (バイパス！という言葉に惹かれて、)で説得力があるように思えたのでそれが良いと思い、二番目を選んだ。お医者さんも賛成だった。

若い女医さんは、「まもなく boss のマークが来ます」と言って、一旦、姿を消した。やがて、彼女の boss なるお医者さんが女医さんと共に現れ、私の問題の右腕をチェックして、彼女の手術計画に賛成である旨を声明して帰って行った。その後すぐに、女医さんは私の所に戻り、私のための手術承諾書を作ってくれ、私はそれにサインをした。女医さんは、「手術室の順番が回って来たらすぐに手術をしましょう。でも、ここは救急病院で、いろいろな患者さんが手術の順番を待っているので、待ち時間が長くなるかも知れません」と言って立ち去った。(後で分かったことだが、 この病院は、teaching hospital なの

で、経験のあるベテラン医師と若手医師とが組（ pair ペア ）になって手術をするようであった。ベテラン医師が若手医師に、手術の計画を立てさせ、実際の手術の場に立ち合わせて指導する。うまく出来ている、と思った。）

私は、それまで、上半身だけ病院服をまとい、ズボンや靴は家から着たまま、履いたままの状態でいたのだが、「手術をするのですから、」と看護婦さんに言われ、パンツ以外は全部脱いで、compression socks と言う、きついソックスをはくことになった。この種のソックスは、手術後、体を動かせない状態で横になっている間、脚に血栓が出来ないようにするためのものだそうだ。長時間飛行機に乗る場合も、このようなソックスをはくと血栓予防になると言われている。

私は、この時点で、既に、血液を薄める薬の点滴が始まっていたように思う。腕時計は外してしまったので、一日の時間の感覚を無くしてしまっていた。病室を眺め回したが、時計らしき物は無かった。多分、１時間くらいは待ったと思う頃、手術室に運ばれて行くことになった。気のせいか？麻痺していた右手の指が、少し温かくなって、多少動くような気がした。点滴の効果が出始めていたのかも知れない。

手術は、かなり長く掛かった感じだったので、終わって、 回復病棟に運ばれて行く時、看護婦さんに「手術はどれくらい掛かりましたか？」と聞くと、“ Just over one hour. ” と、言う返事だった。局部麻酔などの時間を含めても、結構、時間が掛かった事になる。
患者四人の回復病室に運ばれた。幸い、私は、窓際のベッドだった。外はまだ明るく、午後の４時くらいの感じだった。
病室では、寝起きが電動操作で出来る立派なベッドに寝かされ、手術後は、点滴が主な治療であった。私は、うとうとして少し眠ったかも知れない。

６時頃、“ Dinner ！” と言う言葉にパッと寝覚めた感じの私は、ベッドの前に立って私を見つめている配膳係のおばさんに大きな笑顔を送った。早朝からのどさくさで、食べることなどすっかり忘れていた私は、「食べ物」の魅力に俄然元気が出て、ベッドを起こして、枕で背後を支え、きちんと夕食が摂れる態勢を整えた。

気が付いて見れば、ベッドの横の細いテーブルに、jug 一杯の水とコップが置かれてあった。私は、うろ覚えに、チキンを選んだのだと思う。お皿に、ご飯とチキンカレーのような物が供された。私は、手術したばかりの右手はまだ重く痛く感じたので、点滴を受けている左手を使おうとした。しかし、右利きの私には余りうまく行かなかった。結局、手術したばかりの重い右手を休み休み使って一心に食べた。空きっ腹には、なんでも美味しい！ 一気に、全部「ペロリ！」食べてしまった。最初、「ずいぶん量があるなー」と、嬉しく思いながら一心に食べて、すっかり綺麗になったお皿を見て、「そうか。お皿は、真っ平で、ボウルのように中が凹んでいないから！」実質量は、思ったより、少なかったのである。もっと食べれそうなお腹の空間を感じながら、残念に思った。だいぶ後になって、お茶やコーヒーの飲み物が配られたが、その頃には、私のお腹はもう落ち着いてしまって何も欲しくなかった。

点滴を受けている左の手や腕を使って、血圧や脈拍・体温などの検査が頻繁になされていた。入れ替わり立ち替わり、違った看護婦さんが行き来していた。血液検査もあったかも知れない。夕食後、眠る前に、見回りのお医者さんから、「真夜中に血液検査がある、」ことが知らされた。（患者が、眠っているところを起こされて、びっくりしないように、前もって知らせて置いてくれるものらしい。）
夜じゅう、看護婦さんや見回りのお医者さんが何度か来て、私の様子を見てくれていたように思う。

朝になって、昨日執刀した女医さんが、私服姿で私の手術痕を診に来た。「 朝一番。他の仕事に取り掛かる前に」と言う、彼女の責任感と意気込みが感じられた。「後で、ボスが診に来ます。」と言って、帰って行った。間も無く来た執刀主任の医師（ マーク ）は、手術の痕を見、手首を触って脈拍を診て、

“ Good pulse. ” と言って帰って行った。不思議であった。入院以来、右手にはほとんど脈が無く、右指では脈拍数は測れないので、どの看護婦さんも左手の指を使って測っていたからである。

手術の結果は良好との事で、「現在の点滴が終わったら、今日は、別(種)の血液を薄める（ blood thinning ）薬の点滴をし、さらに、注射もしましょう」と言って、主任のお医者さんは帰られた。しかし、いつになっても、新しい点滴が始まる様子は無かった。忘れられたのかも知れない？ （ 翌日から junior doctors のストライキが予定されている、と聞いていた。）あるいは、中止になったのかも知れない？ しかし、私としては、「薬無しで済む事なら、それにこしたことは無い」と思い、時折、私の様子を見に来る看護婦さんにも、お医者さんの朝の言葉を伝えなかった。
手術をしてちょうど一日が経過した頃、私は、点滴の設備から完全に解放された。（ 結局、二度目の点滴は無かったのである。）いつでも自由に、自分ひとりでピョンピョンとトイレに行けるようになると、同室に居る他の患者さんに興味が向いた。私を含めて四人だが、私の横の患者さんは、右脚全体が痛むようで、唸り続けていた。しかし、英語を話さない患者さんだったので意思の疎通ができなかった。向かいの K おばあさんは、私は初め気が付かなかったのだが、右脚の膝下全部を切断していた。私は、ショックだった。やはり、血栓の為だったのだろうか？「もう、生きて居たくない」と、おばあさんは言ったような気がする。私は、突然、激しく込み上げて来る涙を抑えられずに、お婆さんの手をきつく握って、「強くならなければいけません！強くならなければいけません！」と、涙にむせびながら言った。

斜め向こうのベッドの S お婆さんは、私くらいの年であった。ゆっくりではあるが、自由に起きてトイレにも行けるし、フレイムで支えて歩き回ることも出来た。彼女は、右脚に血栓が出来て、気を失って台所の床に倒れたのだそうだ。運良く、頭などを打たなかったのだろう。彼女は、手術 をする事もなく、血液を薄める薬だけで治しているとの事だった。その夜、この S お婆さんと私は、血液を薄める薬の注射をうたれた。私は小さい時から注射に慣れているのだけれど、この注射はかなり痛いと思った。S お婆さんは、案の定（？）いっとき（ 一時 ）、大きな悲鳴をあげた。しかし、その痛さは、注射を打った瞬時のもので、その後すぐに消えた。

翌朝は、consultant と言う資格のお医者さんが検診に見え、私を診た後、病室を出ながら、“ Send her home. ” と言っているのが聞こえた。これで、私の退院が本決まりとなったのだと判断した。
しかし、そうは言っても、私はすぐに、家に帰れるわけではなかった。昼食前に、病院の薬局部門の主任が私に挨拶に来た。「これから、あなたの必要な薬について会議を持ちます。退院時までには準備をして置きますから、忘れずに持ち帰って下さい。」と言って帰って行った。私がこれまでに飲んで来た薬と、これから新しく飲まなければならない薬の種類と量などを総合して、結論を出すのであろう。有難いことだと思った。
それから、セラピストが来て、右腕が上がるかどうか、右指５本の屈伸に問題が無いか、などを調べに来てくれた。指や手の軽いマッサージなども勧めた。最後に、“ Don’t come back. ” と、冗談 を言って帰って行った。

この日は、私のみならず、向かいの K おばあさんも忙しかった。マッサージ師から背中と体全体のマッサージを受けた後、車椅子に座って、いくつかの基本的作動の特訓を受けていた。「もう、生きたくない」などと言う、甘っちょろい（ ? ）考えは、病院では許されないようだった。「必要なことを全部して、患者を早く退院出来るようにする」と言うことが病院の使命なのだろう、と、私は思った。 彼女も、その気で、真剣に覚えていた。前夜、友だちか親族かに、電話で、「もう、７週間も経って、うんざりしている」と、K さんは言っていたが、この日の K さんは、前向きで、真剣で、すっかり別人であった。車椅子の指導者の言葉だと、「まだ、あなたの頭は、あなたの右脚はもうそこに無い、と言うことが分かっていないのです。右脚を触って痛みを感じながら、頭にその事を教えて行く必要があるのです」と言うようなことを説明していた。私は、「頭の働き」って、そう言うものなのか？と、感心しながら聞いていた。

昼ごはんを食べた後も、私は、まだ、いつ、退院の用意をすれば良いのか分からなかった。本当に、今

日、退院になるのだろうか？
夕ご飯の出る頃になって、看護婦の長の人から薬袋と書類が届けられ、それを持って退院となった。K さんと S さんに挨拶をし、居合わせた看護婦さん達に挨拶をして病院を去った。二泊三日の病院生活であった。

後記：NHS の病院と言っても、個々、さまざまな特徴があり、患者の取扱いはまちまちである。以前住んでいた地域の病院で、私は、検査資料全てを失くされてしまった経験がある。今回は、全てを総合して、幸運であったと思う。まずは、私の血栓 ‘blood clot’ は、今回、右腕の肘の辺りにある血管（ulnar artery ）を塞いでしまった訳であるが、運が悪ければ、脳血栓（ stroke ）の可能性もあったし、心臓発作（ heart attack ）の可能性もあったと言われる。脳血栓の場合は、脳細胞に酸素と栄養素を運ぶ血液が届かず、半身不随とか言語障害とかが起こったことだろう。 heart attack ならば死に至る可能性もあったであろう。私は、これまで、何年も、血圧を下げる薬とコレステロールを下げる薬を飲んで来た。それでも、血栓は起こることが分かる。S おばさんも、「これまで、毎日アスピリンを飲み続けて来たのだけれど、」と言っていた。薬の方に変化がないとすれば、私達の体に変化が起きている、と言うことになるのだろう。つまりは、老化？と言うことなのだろうか？

更に、私は、以前、「不整脈」がある、と言われていた。その、不整脈の原因は、心臓の弁に問題があることも分かっていた。その時の医者の言葉は、「 mild なので様子を見ましょう。」と、言うことであった。今回の出来事は、当然、私の不整脈体質と関係があるようである。
不整脈のある体質の人は blood clot が出来やすい、と言われています。いつもと違う感じの麻痺などが起こったら、素早く、111 などに通報して、アドバイスを受けることをお勧めします。

この記事が、読者の皆さんに、少しでもお役に立てたら幸いです。

藤原栄さんと呼べば色々なことが一度に思い出されてきます。
小柄な体に元気が溢れるばかりで、ロンドンの家かと思えばフランスの家にと、その維持・管理や長旅の疲れもものともせず、英仏両国の生活を存分に楽しんでおられたご様子でした。
それにいつも感心したのは、勉強家だったことです。看護師の資格をお持ちだったせいか、代替医療にも造詣が深く、アロマセラピー、レフレクソロジー、マッサージ、指圧と多くの方々に助言や治療を提供されていたと聞いていました。いつか私がお貸しした、グラハム・ハンコックの「神々の指紋」にひどく感銘を受けられ、彼の他の著書を何冊も購入し、又講演会にも出向き、実際色々質問までされたと聞き、その熱心さに驚くとともに感心もしてしまいました。その他食事療法で、血圧やコレステロールをコントロールしたり、彼女の庭にやって来る狐達の世話をしたりの話も聞かせてもらいました。ただ、コロナ蔓延以来、お話する機会がほとんどなかったのが残念でしたが、その内いつかどこかで・・・・と思っている今日この頃です。（８月３１日歿、享年７８歳）

英国日本人会の皆様

田辺邦彦・和恵

拝啓

暑い夏をいかがお過ごしでしょうか？
日本では 25 度を超えると夏日、30 度を超えると真夏日、35 度を超えると猛暑日といいますが、東京の 7 月の猛暑日は 13 日を数え、過去最多になったそうです。7 月のこれまでの記録は 7 日、年間猛暑日数の記録は 16 日でこの記録の更新もほぼ確実の状況です。熱中症になる人も多く、死者も出ている状況です。欧州にも熱波が続いていると聞いております。皆様方も体調にはくれぐれもご用心ください。

このロンドンでの 3 年間の勤務は、私ども夫婦にとって、最も温かい気持ちにさせていただいた在外勤務でした。

最後にロンドンを訪れたのは 2018 年 9 月のジャパン祭りですので、もう 5 年も皆様のお顔を拝見しておりません。5 年の間に私の人生にもいろいろな出来事がありました。まずは外務省定年退官。そして親方日の丸に守られた外務省の仕事しかしらなかった人間が、企業のサービス業に就職。などなどちょっとした出来事がありましたので、近況方々紹介させていただきます。

2018 年退官後の田辺邦彦の人生の出来事は次の通りです。

2018 年 3 月　定年退官
2018 年 6 月　一般社団法人　海外邦人安全協会　理事に就任（無給）
2019 年 9 月　野村不動産パートナーズ入社（マンション管理員）
2020 年 2 月　コロナ流行（未だコロナに感染しておりません）
2021 年 4 月　母逝去
2022 年 6 月　マンションから戸建て（借家）へ転居
2022 年 8 月　マンション売却
2022 年 9 月　4 人目の孫誕生
2023 年 3 月　外務省再入省（週 3 日の非常勤職員）

海外邦人安全協会
海外邦人安全協会は、昔から外務省と連携して活動しており、主に中小企業が海外進出する際に安全対策につき相談に乗ったり、海外安全に関するセミナーを毎月開催したり、講演を行ったりする法人ですが、設立当初から役員（10 名）は無給です。月 2 日くらい事務所に行って、今後の事業について話し合ったり、理事それぞれは 1 年に 1 回くらい講演を行います。今も理事を継続しておりますが、来年あたり後輩に引き継ごうと思っています。

野村不動産パートナーズ入社
マンション管理員になったのは、退官後毎日暇で、ＤＶＤを見たり、ゴルフの練習をしたり、カラオケに行ったり、老人ホームのボランティアをしたり、病院、買い物などの女房の運転手という生活に飽きが来たので、ゴルフのプレー代稼ぎでもしようと応募したものです。週 4 日、8:00-18:00 の勤務で、大規模マンションなので毎日 1 万歩以上歩き、勤務して半年後には 145 前後だった血圧が 120 台になり、胃腸の調子もよくなり、まるでジムに行ってトレーニングをしてお手当までもらえるという夢のような仕事です。フロントレディ 2 名、管理員 3 名、清掃員 8 名、警備員 3 名、マンションマネージャー1 名の大所帯で、管理員は敷地内を巡回して、蛍光灯交換、ドア開閉の調整、郵便ボックスの修理、駐車場

のライン引き、リフォーム業者・引っ越し業者・宅配業者の管理・車誘導、エレベーター（17 基）内のチェックなどが仕事です。たばこの吸い殻拾い、犬の糞の始末など簡単な清掃はしますが、基本的に清掃は清掃スタッフがやります。

母逝去

２０２１年４月に母が亡くなりました。享年 94 歳、大往生です。83 歳で老人ホームに入ってもらったのですが、最初の１年は慣れない環境で、持病のパーキンソン病が悪化し、入退院を繰り返し、幻聴幻視も見えるようになり、あまりにかわいそうで、「お袋、ごめんな、老人ホームに入ったためにこんな状態にしちゃって」と泣きました。幸い、友人もでき、介護ヘルパー達とも仲良くなり、その後のホーム生活は楽しいものだったようです。しかし寄る年波には勝てず、最期の１年はほぼ病院暮らし、3 年くらい前から私のことも息子と理解できない状況でした。「邦彦だよ」と言うと「うそだ、邦彦はもっと若い」と、年とった息子の顔を認識できないようでした。

戸建てへの引っ越し

家内がガーデニングをやりたいからどうしても戸建てに住みたいというので、1 年以上探していたのですが、なかなか予算に見合う物件が見つからず、でも、女房はそのうち動けなくなっちゃうと言うし、ちょうどいい賃貸物件があったので思い切って引っ越しました。幸い働いていたから給料で賃貸料はほぼ賄えるし。引っ越してよかったです。快適です。閑静な住宅地ですし、庭も広く、隣との隙間も広く、さすが川崎市奥地のちょっと高級住宅地。マンションでは近所のたばこの煙が不快であったけれど、戸建ては近所からの臭い、音が全く気にならず、ときどきギターを弾いて歌をうたっています。モスクワ、キャンベラ、アブダビ、ロンドン、カルガリーと全部賃貸でしたから、慣れていますし。女房が庭仕事をできなくなるまで、この賃貸で暮らすのも悪くないな。

四番目の孫誕生

昨年 9 月に十年ぶりに孫が誕生しました。一番上は 15 歳、二番目 12 歳（以上息子の子供）、三番目 10 歳（娘の子）、そして娘に四番目の孫が誕生しました。上と 10 歳も離れています。しかし、可愛い。文句なしに可愛いです。6 キロ離れたところに住んでいるので、毎週通っています。大泉逸郎の歌「孫」の「なんでこんなに可愛いのかよ」という歌詞が本当に理解できます。「おじいちゃま」と呼ぶよう教育中ですが、他の孫が「じいじ、じいじ」と連呼して邪魔しており、どうなることやら・・・。

外務省入省（非常勤職員）

昨年 9 月、孫の誕生数日前に外務省人事課からちょっと力を貸してほしいと声がかかりました。もう退職して 5 年も経過しているのに。しかし、ジムに通っているような仕事で給料をもらうのも悪くないが、古巣から請われるのも悪くないし、外務省の役に立つのであればそれは本望でもあるし、第一、週 3 日なのに週 4 日のマンション管理員より給料が高いし。ただ、通勤がだいぶ辛くなるが・・・。というわけで、今年３月 20 日より外務省で働き始めました。4 月からは「人事課業務復帰支援室長」というタイトルまでいただき、室長として（といっても５人の部屋ですが・・・）働いております。内容は、病気で休職に陥ってしまった職員が体調回復してきたら、業務に復帰できるよう支援する仕事です。スタッフ 3 人は国家資格の持ち主で専門家ですので、そのスタッフにこき使われておりますが・・・。この歳になっても外務省に貢献できる、ひいては国に貢献できるのであれば、それは尊い仕事であるのかな、と思い、専門家のパワハラを受けながらも、職務に邁進しております。

以上、勝手ながら近況を報告させていただきました。家内と孫と撮った写真を添付いたします。

もしロンドンに赴く機会がありましたら連絡いたしますので、歓迎してくださいませ。
敬具

2023 年 8 月吉日

読んだ、憧れた、行ってみた
― 西域を旅した人々について ―

中沢賢治

密偵から巡礼僧になった西川一三の生き方

第二次大戦の前後に内モンゴルから中国奥地に潜入し、さらにチベットからヒマラヤを越えてインドへと旅した人を描いた沢木耕太郎著「天路の旅人」（新潮社、2022 年）という本がベストセラーとして書店に飾られていた。主人公の西川一三はユニークな経歴を持っている。山口県出身の同氏は福岡の旧制中学を卒業すると満鉄に勤務するため戦争下の大連に赴任する。5 年ほど働いた後に大陸各地で活動できる人材の養成のために作られた興亜義塾に入塾した。25 歳で卒業し、密偵としての任務を得て旅立ったのが 1943 年だった。敵地を旅する必要からモンゴル人のラマ教(チベット仏教)僧侶になりすまし、巡礼者として聖地チベットのラサをめざす。「秘境西域八年の潜行」（芙蓉書房、昭和 42 年)という手記に、旅の詳細が記録されている。ラサに到達した後も、インドに滞在し、パキスタン、アフガニスタンへの巡礼をめざすが、第二次大戦後に印パ紛争で国境が閉ざされたのでこの夢を果たせなかった。結局、滞在していたカルカッタで不法滞在者として拘束される形で旅を終え、1950 年に帰国する。

沢木耕太郎は 1988 年に放送された TV 番組で西川一三のことを知り、盛岡在住の同氏を訪ねた。その後も 1 年以上にわたって訪問を続け、聴き取りを行った。ヒマラヤを何度も越える冒険者だった旅人は 70 代後半の老人になっていた。聞かれたことに淡々と応えていた西川一三が、沢木耕太郎もインドの同じ街で野宿旅をしたことを知ると、二人の会話が熱を帯びる場面が面白い。話を聞きだす側もベストセラーとなった紀行「深夜特急」を書いた旅の達人なので話は弾んだことだろう。2023 年の TV 番組のインタビューで沢木耕太郎は「天路の旅人」の完成について「時間がかかったがようやく書き上げた。最後のドキュメンタリー作品になったとしても悔いはない」と紹介している。

西川一三は戦争が終わってからも旅を続けた理由について「ラマ僧にとってのなによりの修行は、旅をしつつさまざまな土地を遍歴すること」であり、「だから自分は、中国からチベットへ、そしてブータンからインドへと巡礼してきた」(「天路の旅人」第 13 章）と説明している。このことについて沢木耕太郎は「西川一三は密偵から旅人へと変わった。彼の旅の純度が増したのである。その純度が鮮烈である」と解釈している。自由な旅人として単独行を続けるということは「自分で何もかもしなければならない。生きる手立てを身に着ける」ことである。沢木耕太郎は、日本に送還されて以降の西川一三が「単純なことの繰り返しの日々を送り、そのことに充足している」ことにも注目した。帰国してからの同氏は盛岡で細々と自営業を続けながら 89 歳まで生きた。

西川一三は帰国を果たしてから旅の記録の出版を目指したが、すんなりとは話が進まなかったようだ。その頃に原稿の清書を手伝ってくれた恋人（その後の西川夫人）と知り合う。「天路の旅人」の終章に二人が結婚を決めた時の話合いの様子が紹介されていて興味深い。「いつまでもインドに行きたいとかアフガニスタンに行きたいとか夢のようなことばかり考えていないで、一日一日をしっかり生きるほうが大切なんじゃない？」 希代のヒマラヤ冒険家に市井の人として生きることを決意させた女性の影響力は偉大である。

優れた評伝作家である沢木耕太郎だが、既に手記のある人物について、どういう切り口ならば新たな作品になり得るのかを模索してきたことが「天路の旅人」で説明されている。ブレイクスルーのきっかけになったのは西川一三の没後に 3200 枚にわたる原稿が見つかったことだった。1967 年に出た扶桑社版に続いて、1990 年に中公文庫版が出た時の元編集担当者を探し当てた沢木耕太郎は、段ボール箱二つに入った膨大な量の原稿が廃棄されずに存在していたことを教えられて驚く。遺族の了解を得て生原稿を入手すると、まずは中公文庫版と生原稿との突き合わせに取り組んだ。さらに生前の西川一三にインタビューした時のテープを聴き直し、生原稿と突き合わせる作業も行った。多忙な作家である沢木耕太郎がこの仕事に取り組むことができたのは 3 年にわたって猛威をふるったコロナ禍で、他の仕事のための取材旅が出来なかったことが影響したと書かれている。「天路の旅人」を読んでから、鎌倉中央図書館で

扶桑社版「秘境西域八年の潜行」3 巻を手にとってみた。昔の本は活字が小さくて大変だが、旅をした本人の言葉で書かれた記録をこれからゆっくり読むつもりである。

２．河口慧海のチベットへの旅

「天路の旅人」の中で、西川一三より早い時期にチベットに入った 7 人の日本人たちが紹介されている。1901 年に日本人として最初にチベット入りを果たしたのは僧侶の河口慧海である。鎖国状態にあったチベットを訪れるために、日本人であることを隠し、ラマ教のモンゴル人僧侶として旅をしたことが二人の旅人に共通している。私が河口慧海を知ったのは、地元鎌倉市の極楽寺にある成就院を訪れたのがきっかけだった。こちらの境内に河口慧海がチベットから持ち帰った招来仏のレプリカが飾ってある。彼の「チベット旅行記」（講談社学術文庫、2015 年）は書棚に積んであったので読んでみた。

河口慧海は、巡礼僧に変装したのではなく、日本で修業を積んだ僧侶であり、チベット仏教の聖地を訪れ、未伝来の経典を日本に持ち帰るという明確な目的を持っていた。国籍を偽ってのラサ滞在中には偶然が重なり「外国からきた名医」、「謎めいた外国派遣の高官らしき人」として周囲の人々から厚遇された。他方で、西川一三は行く先々で托鉢をして命をつなぎ、現地社会の最底辺をめぐりながらも、新鮮で自由な空気を感じていた様子が「天路の旅人」に描かれている。日本に帰ることになった時も旅の終焉を惜しんでいるほどである。

「天路の旅人」、「チベット旅行記」のどちらも厳しい旅の様子が活き活きと描かれていることが共通している。「天路の旅人」ではモンゴル人ラマ僧が巡礼の時に身に付ける典型的な旅装として、毛皮製で裾の長い蒙古服と蒙古帽、革製のズボンと蒙古靴が列挙されている。旅を始めた時はラクダの背中に荷物を載せたので着替えも用意しただろうが、旅の途中から歩いて移動するようになると荷物は軽くせざるを得ない。防寒のためもあって着たまま眠るとなると、汚れや匂いが気になりそうだ。河口慧海は、ある雪山の小さな村に滞在した時の村人たちの様子を「着物はどんな汚い物を着て居ても構わない。それも年に一度ずつ新しい物と取り替えるに過ぎぬからバタ（バター）と垢で黒光りに光って居るです」と書いていて圧倒される。

命をつなぐ食べ物が大切であることは言うまでもない。沢木本では「ツァンパ」、西川本では「煎り粟」、河口旅行記では「麦焦し紛」などと記述されている食べ物が命の綱だったらしい。大麦の類である。飲み水としては雪を溶かしてお湯を沸かし、バター茶を作るのでお椀と鍋を常に携行することが必須となる。河口慧海は「袋の中から麦焦しの粉を出して椀の中に取り入れそれに雪と幾分かのバターを加えてこねる。。。麦焦しと雪とバターとでよくこねて唐辛子の粉と塩とを付けて喰うのです。。。極楽世界の百味の飲食もこれに及ぶまいかと思うほど旨かったです」と書いている。よほどの空腹状態だったのだろう。麦焦しは「香煎」とも呼ばれることがある。私の妻に「子供の頃にこうせんという名前の菓子を食べた記憶があるけれど、こういう旅の記録本によると栄養に富んでいるらしい」と言うと、アマゾンで取り寄せてくれた。昔食べたことのある味だ。製造元のラベルを見ると私が育った見附市の今町で作られたものだったので、不思議な気分になった。

夜露をしのぐ場所としては、草原や雪原では遊牧民か商人たちのテントを見つけ、街を通過する時は屋根のある建物の中に入れてもらえれば良いが、何も見つからない場合には野宿するしかない。この時にモンゴルで「アルガリ」と呼ばれる家畜の糞の乾燥したものを集めて火を起こすことが重要になる。河口慧海の旅では、従者を雇うなど旅費の余裕があったようだが、西川一三は、ラクダを引いていく駝夫の仕事をしながらの旅も経験している。彼が旅を始めた頃に直面したのが雪の降る草原でどうやって乾燥したアルガリを拾い集めるかという仕事だったようだ。湿ったアルガリの場合には簡単に燃えないどころか、手が汚れてしまう。このような状態で麦焦しをこねて食べる生活を続けるのは想像を絶するものがある。様々な試練が連続した旅の中で西川一三は何でも一人でできる自由人として成長していったのである。

この旅行記の中に、私の郷里である長岡市の出身で、母校長岡高校の同窓生でもある井上円了(妖怪研究の権威)と藤井宣正（大谷探検隊の主要メンバー）の名前が並んで登場して驚いた。河口慧海は日本人であることを隠していたことが露見しそうになり、多くの経典を含む荷物の運送を手配した後に、インドに脱出する。無事に国境を越えるとカルカッタで恩師である井上円了と合流し、ブッダガヤに向かう同郷出身の僧侶藤井宣正と偶然に再会する。ちょうどその頃、チベット滞在中に助けてくれた人たちが共謀を疑われて投獄されたとの知らせを聞く。責任を感じた彼は、恩人たちを救うべく隣国ネパールの首脳を動かしてチベット側に働きかけてもらうという方策を思いつくが、このためには彼自身がネパール入りする必要があった。この計画について井上、藤井両師、ブッダガヤに滞在していた大谷光瑞門主も交えて 4 人が話し合う。一同は「苦労を重ねて入手した仏教研究の成果を日本に伝えることを優先すべきであり、これ以上の危険を冒さずすぐに帰国すべきである」と河口慧海に勧めた。この時に河口慧海は「自分を信頼してチベットにおける仏教研究を手伝ってくれた人々を見捨てて帰国し、その研究の成果で世界に名前が知られることになるとしたらむしろ恥ずかしい」として、日本への帰国を延期してネパールに行くことを選ぶ。筋の通った人だ。

現在、東京国立博物館で「日本初のチベット探検—僧河口慧海の見た世界—」展（2023 年 8 月 22 日から 10 月 9 日)が開催されているので河口慧海の持ち帰ったものを鑑賞することができた。

３．井上靖の西域への旅

井上靖は西川一三の本の序文を書いている。「「秘境西域八年の潜行」は、全く新しい。私たちはここに初めて同時代人に依る西域紀行を得たわけである。私は著者西川一三氏の稀有な運命に対して大きな嫉妬を感じるものである。」という好意的なコメントである。私は「しろばんば」、「夏草冬涛」などの自伝的作品を中学生の頃に読んで井上靖を好きになったが、彼の散文詩の中でシルクロードや西域を舞台にした作品が強く印象に残っていた。

井上靖は中国、モンゴルを舞台にした「敦煌」、「蒼き狼」などの他にキルギスやタジキスタンなど中央アジア各地が登場する短編も書いている。「私の西域紀行」（文芸春秋、1983 年）という本の中に、彼が 1943 年に出版された松岡譲著「敦煌物語」（平凡社、新装版 2003 年）を読み「敦煌へ足を踏み入れてみたいという思いが強くなり、それから 14－5 年経って「敦煌」を書いた」という記述がある。井上靖が実際に敦煌を訪れるのはそれからさらに 20 年経ってのことだ。松岡譲は旧制長岡中学の出身であり、この点でも長岡とのつながりを見つけてうれしい気持ちになった。

私は 1993 年から 2015 年まで旧ソ連地域の冷戦後の復興支援のために創設された欧州復興開発銀行（EBRD）に勤務したが、1990 年代後半には中央アジアの電力関係の仕事に関わるようになった。1999 年からウズベキスタンで 5 年、2007 年からキルギス共和国で 3 年駐在した。井上靖を読み続けてきた自分にとって、彼の小説に登場するサマルカンド、ペンジケント、イシク・クル湖などがある国々で暮らすことになったことは大きな喜びだった。19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて中央アジアが国際的な注目を集めた時期もある。Peter Hopkirk という人が書いた「The Great Game」（Oxford Paperbacks, 1990）には、南下を目指すロシアとインド・パキスタンから北上を目指す大英帝国が中央アジアを舞台にして探検競争を行った様子が描かれている。日本からも 1902 年に始まった大谷探検隊が活躍している。興味のある人には長沢和俊編「大谷探検隊 シルクロード探検」、深田久弥著「中央アジア探検史」（白水社、1971 年、新装版 2003 年）が面白いはずだ。

４．私のフンザへの旅

コロナ禍が収まりかけた 2023 年 3 月にパキスタンのフンザに写真撮影の旅をした。10 年以上前に宮本輝の文章を読んで以来、いつか訪れてみたいと思い続けた場所だった。同氏が、シルクロードに興味を持っていたことについては井上靖の影響があり、２人の対談録も残っている。宮本輝の 1997 年の中国からパキスタンに至るシルクロードの旅は「ひとたびはポプラに臥す」（講談社文庫、2002 年）

という紀行文になった。小説「草原の椅子」(新潮文庫、2008 年) はフンザの追憶から始まり、再訪の旅で終わる物語である。「(主人公が)突然、老人に話しかけられたのは、夕日がラカポシの頂きのうしろに隠れ、フンザの村の家々に明かりがつきはじめ、星が姿をあらわした時刻だった」という場面が心に残っていた。

フンザは古都であること、シルクロードの要衝であること、渓谷美と春に杏の花が村中に咲くことで知られている。成田空港からバンコク経由でパキスタンの首都イスラマバードに入った。一泊して、国内便で北部山岳地帯にあるギルギット空港へ飛んだ。このルートを車で移動するとカラコルムハイウェイ経由で 10 時間近くかかる。帰り道であちこち停まりながらゆっくり行くのは楽しかった。切り立った渓谷の向こう岸の中段に旧シルクロードが続いているのが見えた。

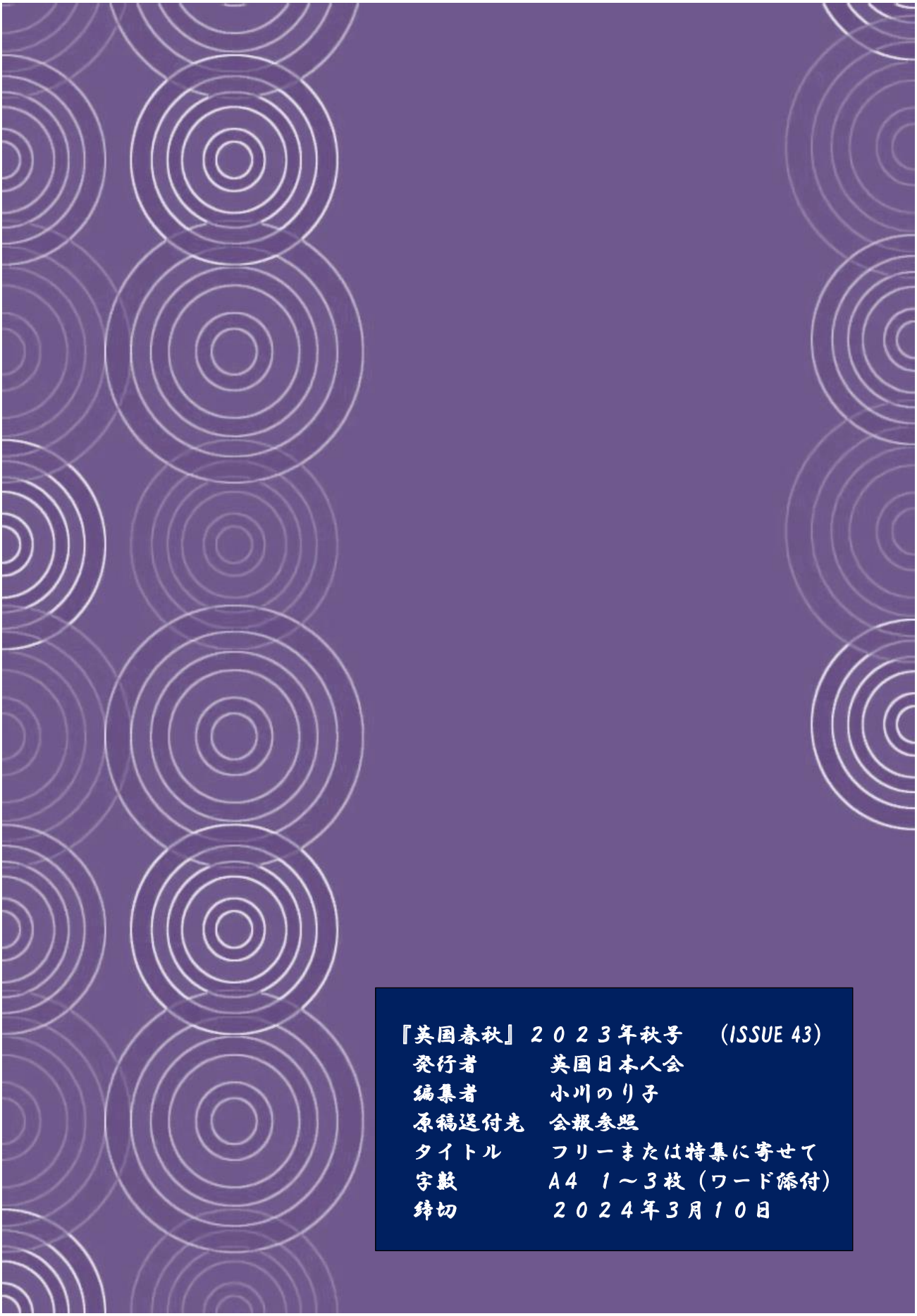
山岳地帯への玄関口であるギルギットは渓谷を流れる川の中州にある。晴れていないと欠航したり、目的地上空で着陸困難のため引き返したりすることもある。この日も雲が出ていたが、窓から雲間に浮かぶカラコルム山脈が見えて感激した。地元では 6-7 千m級の峰々は多すぎて、いちいち名前がつかないらしい。白砂の目立つ川原も見えた。インダス川へと合流していく源流の周辺には氷河がある。シガール渓谷のホテルに数日滞在してからフンザ渓谷にあるカリマバードに向かって車で移動する途中で、雲に浮かんだナンガパルバット峰が見えた。世界第 9 位、8126mの高さの山で、雲に覆われて姿を現さないことが多いそうだ。標高 2500mの地点辺りでランチのパンを食べながらのんびりと名峰を眺めた。河口慧海も西川一三も眺めたはずの山である。

私たちの旅に添乗してくれた旅行会社の人は、偶然にも映画「草原の椅子」(2013 年公開)の撮影隊のフンザロケをサポートした人だったことがわかり、映画撮影当時の話を聴かせてもらった。私たちのグループがシガールで 3 日間滞在した同じホテルに、この映画の撮影隊も滞在していた。中国側にあるタクラマカン砂漠の場面をシガールの白い砂丘で撮影したそうだ。氷河で削られた白い砂が風に吹かれると川原だけでなく丘の上まで砂嵐になる。

若い時に病気で死にかけたことがある宮本輝は近しい人との別離、人生の後半を迎えて再生をはかることについて様々な作品を書いてきた小説家である。「草原の椅子」の主人公たちは、日常の暮らしから旅立ち、死の砂漠タクラマカンを訪れることで「一度死ぬ」ことを経験し、国境を越えて長寿の杏の里へ辿り着く。フンザの街を見下ろすドゥイカルの丘の上から真っ暗な空に浮かぶ北斗七星を撮影した。静寂と乾燥した空気の中で心に残る 1 枚となった。三蔵法師も、井上靖も、宮本輝も見たかも知れないフンザの星空である。

上部フンザ地方に移動して氷河に囲まれたパス―の宿に 2 泊した。ここからは中国との国境であるクンジュラブ峠はもう近い。車で向かったが、峠までもう少しというところで道路に氷が張っていて危ないため引き返すことになり残念だった。イスラマバードに陸路で戻る途中でチラスという川べりの街に 1 泊した。この岸辺で大きな岩に刻まれた仏さまの絵を眺めた。経典を求めての旅の途中で水量が増えていて足止めされた僧侶たちが描いたものである。合掌。

(文中、敬称略)



『英国春秋』２０２３年秋号　（ISSUE 43）

発行者	英国日本人会
編集者	小川のり子
原稿送付先	会報参照
タイトル	フリーまたは特集に寄せて
字数	A4　１～３枚（ワード添付）
締切	２０２４年３月１０日